
Parallel † Cross - **遊戯王**EXA -

クレセント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ParallelCross - 遊戯王EXA -

【Nコード】

N1899U

【作者名】

クレセント

【あらすじ】

遊戯王EXA。それは、遊戯王の世界でありながら誰にも存在を知られなかった物語。

そして、その世界に飛ばされた少年。蓮という名の少年は、その世界で何を紡ぐのか。

世界が神に捨てられたとき、残された人々は心に何を描くのか。

T D T R ・ J P P 0 0 1 〈 はじまり 〉 (前書き)

初めての方は初めまして。 そうでない人もとりあえず初めまして。
クレセントです。

この小説は、「遊戯王EXA」という物語にトリップしてしまった少年、空見蓮と友人及びその他数名（何人登場予定かは未定。とりあえず5人以上とは言っておく）が自分たちの知らない原作に介入してるかどうかも分からないまま日常を過ごしていく物語です。：
以上！

長くなってしまうましたが、第1話です。 それでは。

7 / 2 2 2 1 : 2 0

前書き追加。 ライフ表示フォーマットを統一。

7 / 2 2 2 3 : 1 7

モンスター表示フォーマットも統一。

T D T R ・ J P P O O 1 〈はじまり〉

えー、どうも、初めまして。違う人はおはようございます。空見蓮そらみれんです。

「はい、そこまで！ペンを置いて後ろから回答まわせー」

…えーっと、今は試験中だったみたいです。あ、回答まわってきた。とりあえず前にまわしてつと…。

うん、名前書いてないんだ。何の試験かは知らないけど、とりあえず不合格は確定ってことで。

「次は実技試験だ。30分後に第5ホールに集合。くれぐれも、受験票とデッキを忘れるなよ」

…はい？

受験票は…あ、これが。172番って書かれてる。

それと…”デッキ”？

今俺、遊戯王のデッキしか持ってないんだけど…？

P a r a l l e l t C r o s s

T H E D U E L I S T T R I P P E R

…うん、遊戯王で合っていました。いつものカバンにデッキ入れとい
てよかった。

というわけでこの世界での初デュエルだそうですよ。お相手はさっ
き実技試験の説明をしてた試験官の武藤さん。…名字からして嫌な
予感がするね。あ、デュエルディスクはアカデミアのを貸してもら
えました。一応GX仕様です。多分。

「さて、デュエル…と言いたいところだが」

「はい？」

「お前が試験用紙に名前を書かなかったから俺もなんて呼べばいい
かわからない」

「…すいませんでした」

ほんとにごめんなさい。

「筆記試験で名前すら書かなかったやつはお前と…あと1人いたそ
うだが、そいつとお前が初めてらしいからな」

…言えない。試験中ずっと寝てたなんて言えない！

「まあとりあえずだ。172番、名前は」

「空見蓮そらみれんです。空を見るって書いて空見、下はハス…かな？それで

蓮です」

「わかった。おい、登録頼む！」

『……はい、登録完了しました！』

「よし。じゃあ始めるか」

「はい、よろしくお願いします」

ここでとりあえずルールの確認。

- ・ライフポイントは互いに8000（いつもの2倍とか言ってた）。
- ・先行は（問答無用で）試験官。
- ・実技の点数は300点満点。配点は以下の通り。
- ・デュエルに勝利 100点
- ・先に相手のライフを4000以下まで削る 100点
- ・その他細かいところ 合計100点

「デュエル！」

1st	Reiji	Mutou	LP	8000
2nd	Ren	Sorami	LP	8000
Turn.1	Player:	Reiji		
Reiji	LP:	8000	HAND:	5
Ren	LP:	8000	HAND:	5

「俺のターン、ドロー！」

先生がが勢いよくカードをドローする。

「俺は《魔導戦士 ブレイカー》を召喚！」

《まどうせんし魔導戦士 ブレイカー》
効果モンスター

星4 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻1600 / 守1000

このカードが召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを1つ置く（最大1つまで）。

このカードに乗っている魔力カウンター1つにつき、このカードの攻撃力は300ポイントアップする。

また、このカードに乗っている魔力カウンターを1つ取り除く事で、フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を破壊する。

現れたのは深紅の鎧を纏った騎士。鎧にはとところどころにマジックストーンがはめ込まれている。

魔導戦士 ブレイカー 4 ATK / 1600

「《魔導戦士 ブレイカー》の効果を発動！ブレイカーが召喚に成功した時、こいつに魔力カウンターが1つ乗る！そしてブレイカーの攻撃力は自身に乗っている魔力カウンター1つにつき300ポイントアップする！」

魔導戦士 ブレイカー (0 1) ATK / 1600 1900

「さらにカードを2枚セットしターンエンド！」

Turn : 2 Player : Ren
Reiji LP : 8000 HAND : 6 3
Ren LP : 8000 HAND : 5 6

よし、俺のターンだ。

「俺のターン、ドロー」

手札は…よかった、事故ってない。

「《竜の溪谷》を発動」

《竜の溪谷》
りゅうけいこく

フィールド魔法

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に手札を1枚捨てる事で以下の効果から1つを選択して発動する事ができる。

自分のデッキからレベル4以下の「ドラグニティ」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

自分のデッキからドラゴン族モンスター1体を墓地へ送る。

俺の使う【ドラグニティ】は《竜の溪谷》を基軸としたビートダウンデッキ。初手にこのカードが有るか無いかで、展開力に大きな差ができてしまう。

「フィールド魔法か…。だったらチェーンだ！《サイクロン》発動！」

ですよー。

《サイクロン》

速攻魔法（準制限カード）

フィールド上に存在する魔法・罫カード1枚を選択して破壊する。

「それじゃ、《テラ・フォーミング》を発動。デッキから2枚目の《竜の渓谷》を手札に加えてそのまま発動」

《テラ・フォーミング》

通常魔法

自分のデッキからフィールド魔法カード1枚を手札に加える。

「結局あったのかよ…」

フィールドが茜色に染まる。気づくとそこは、いつもカードで見慣れている渓谷だった。

「渓谷効果。手札を1枚捨て、デッキから「ドラグニティ」と名のついたモンスター1体を手札に加える。《ドラグニティ・ドウクス》を手札へ」

あれ、捨てたカードってちゃんと言ったほうがいいのか？アニメ

だと言わずに進んでるけど俺たちの世界って墓地とかは公開情報なんだよね。

…まいつか。指摘されないし。

「そして《ドラグニティ・ドウクス》を召喚」

天空から現れたのは白い服を纏った鳥人。俺のデッキの中核を担っている。というか【ドラグニティ】はほとんどのカードが中核だったり。

《ドラグニティ・ドウクス》

効果モンスター

星4 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻1500 / 守1000

このカードの攻撃力は、自分フィールド上に表側表示で存在する「ドラグニティ」と名のついたカードの数×200ポイントアップする。

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル3以下の「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。

ドラグニティ・ドウクス 4 ATK / 1500

「《ドラグニティ・ドウクス》が召喚に成功したとき、レベル3以下の「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター1体を墓地から装備する事ができる。《ドラグニティ・ファランクス》を装備します」

「《竜の渓谷》のコストだな？」

「はい」

宣言と同時に天空から飛来した金色の槍。ドウクスはそれを見事にキャッチした。

ドラグニティ・ドウクス 4 ATK / 1500 + 400 = 1900

「攻撃力が並んだ、だと？」

「《ドラグニティ・ドウクス》には自分フィールド上に表側表示で存在する「ドラグニティ」と名のついたカードの数につき攻撃力を200上昇させる効果があります。自身も「ドラグニティ」なので200×2で400ポイント上昇。よって、合計攻撃力は1900です」

「なるほどな…。だが、それだけじゃないんだろ？」

ああ、さすがにわかるか。

「当然ですよ。装備された《ドラグニティ・ファランクス》の効果を発動。装備されているこのカードを特殊召喚します」

ドウクスの持っていた槍が輝きだす。ドウクスが槍を上空に放つと、金色の槍は小さな竜になって戻ってきた。

《ドラグニティ・ファランクス》

チューナー（効果モンスター）

星2 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻 500 / 守 1100

このカードがカードの効果によって装備カード扱いとして装備されている場合に発動する事ができる。

装備されているこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

ドラグニティ - ファランクス 2T DEF / 1100

「合計レベル6か」

先生が苦い顔をする。

「レベル4・ドウクスにレベル2・ファランクスをチューニング」

4 + 2 = 6

我^{われ}紡^{つむ}ぎしは竜^{りゅう}の槍^{やり}、全^{すべ}てを貫^{つひぬ}く神竜^{しんりゅう}の槍^{やり}。
闇^{やみ}夜^よを照^てらす灯^{ともし}火^びよ、吹^ふき荒^あれる風^{かぜ}と共^{とも}に在^あれ。
シンクロ召喚^{しょうかん}。解^{はな}き放^なて、真紅^{しんく}の結束^{けつそく}。

「《ドラグニティナイト - ガジャルグ》、降臨」

《ドラグニティナイト - ガジャルグ》

シンクロ・効果モンスター

星6 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻 2400 / 守 800

ドラゴン族チューナー + チューナー以外の鳥獣族モンスター1体以上

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に発動する事ができる。
自分のデッキからレベル4以下のドラゴン族または鳥獣族モンスター1体を手札に加え、その後手札からドラゴン族または鳥獣族モンスター1体を捨てる。

ドラグニティナイト・ガジャルグ 6 ATK / 2400

現れたのは赤と青を基調とし、ガジャルグ滅魔の真紅槍の名を冠する竜騎士。

「《ドラグニティナイト・ガジャルグ》の効果発動。自分のデッキからレベル4以下のドラゴン族または鳥獣族モンスター1体を手札に加え、その後手札からドラゴン族または鳥獣族モンスター1体を捨てる。手札に《BF - 精鋭のゼピュロス》を加えてそのまま落とします」

《BF - 精鋭のゼピュロス》のカードを取り出し…そのまま墓地へつと。

「バトルフェイズ、ガジャルグでブレイカーを攻撃！」

…えーっと、カーディナル・フレア！」

…どうやら、攻撃名を言わないと攻撃してくれない仕様だそうです。

真紅の竜が放った炎が魔導騎士を飲み込み、焼き払った。

「くっ……」

武藤 LP 8000 - 5000 = 7500

「カードを1枚セットしてターンエンドです」

Turn : 3 Player : Reiji
Reiji LP : 7500 HAND : 3 4
Ren LP : 8000 HAND : 6 2

「俺のターン、ドロー！……ふっ」

先生が笑みをこぼす。いいカードを引いたのかな？

「俺は手札から《古のルール》を発動！手札からレベル5以上の通常モンスター1体を特殊召喚する！」

《古のルール》
通常魔法

自分の手札からレベル5以上の通常モンスター1体を特殊召喚する。

「さあ、出番だ！……《ブラック・マジシャン》……！」

《ブラック・マジシャン》

通常モンスター

星7 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻2500 / 守2100
魔法使いとしては、攻撃力・守備力ともに最高クラス。

ブラック・マジシャン 7 ATK / 2500

「《ブラック・マジシャン》…！」

《ブラック・マジシャン》。遊戯王を知っていれば知らない人はま
ずいないだろう。初代「遊 戯 王」の主人公、武藤遊戯のエース
モンスターだ。

とりあえず、俺のいやな予感は的中した。この先生、やはり「並行
世界の武藤遊戯」…！

「バトルフェイズだ！《ブラック・マジシャン》で《ドラグニティ
ナイト - ガジャルグ》を攻撃！」

黒魔術師が呪文の詠唱を開始する。セフトカードは互いに1枚ずつ。
警戒していないのか、読まれているのか…。

…どのみち、今回はガジャルグを守る手段がある。使うときは今し
かな

「攻撃宣言時、優先権を行使する！」

い！…え？

「リバーズカードオープン、《マジシャンズ・サークル》！」

……やばい。

「お互いにデッキから攻撃力2000以下の魔法使い族モンスターを特殊召喚する！」

何がまずいのかというと。

《マジシャンズ・サークル》

通常罫

魔法使い族モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

お互いのプレイヤーは、それぞれ自分のデッキから攻撃力2000以下の魔法使い族モンスター1体を表側攻撃表示で特殊召喚する。

テキストには「特殊召喚」する」と書かれている。つまり、特殊召喚は強制効果。それ故に、デッキに魔法使いがいなければ相手にデッキを晒すことになり。

「俺はデッキから《ブラック・マジシャン・ガール》を特殊召喚！」

《ブラック・マジシャン・ガール》

効果モンスター

星6 / 閻属性 / 魔法使い族 / 攻2000 / 守1700

お互いの墓地に存在する「ブラック・マジシャン」「マジシャン・オブ・ブラックカオス」1体につき、このカードの攻撃力は300

ポイントアップする。

それ故に、デッキに魔法使いが1体でもいる場合、いやでも出さなければならぬ。

そう。それが、たとえ

「…デッキから《エフェクト・ヴェーラー》を特殊召喚します」

《エフェクト・ヴェーラー》だとしてもだ。

《エフェクト・ヴェーラー》

チューナー（効果モンスター）

星1 / 光属性 / 魔法使い族 / 攻 0 / 守 0

このカードを手札から墓地へ送り、相手フィールド上に表側表示で存在する効果モンスター1体を選択して発動する。

選択した相手モンスターの効果をエンドフェイズ時まで無効にする。

この効果は相手のメインフェイズ時のみ発動する事ができる。

先生のフィールドに現れたのは《ブラック・マジシャン》の一番弟子である魔法使いの少女。なんとというか、師弟2人が並ぶと絵になるね、やっぱり。

ブラック・マジシャン・ガール 6 ATK / 2000

対して、突如俺のフィールドに召喚されてしまった純白の羽衣を纏う少女の方はというと。

はい、ものすごく動揺してます。そりゃあ、普通はフィールドに出てこないモンスターだからね。

エフェクト・ヴェーラー 1T ATKノ 0

「（・）（・）」

「…続けてください」

「…^{ツク}わかった。《ブラック・マジシャン》の攻撃を続行！^{ブラック・マジ}黒・魔・導！」

ブラック・マジシャンが真紅の竜騎士に杖を向ける。瞬間、色が反転。水色に変色した竜騎士は、ブラック・マジシャンが指を鳴らすと同時にガラスのように砕け散った。そして、その破片の一部が俺の体をかする。

「いたっ」

蓮 LP 8000 - 1000 = 7900

「続けて《ブラック・マジシャン・ガール》で《エフェクト・ヴェーラー》を攻撃！^{ブラック・}黒・魔・導・爆・裂・破！」

マジシャン・ガールが巨大な火炎弾を放つ。対象は、俺の目の前で今にも泣きそうになってる少女。しかし無情にも放たれた火炎弾は、爆ぜた。

そして、その爆風は俺に襲い掛かる。

「くっ…！」

蓮 LP 7900 - 2000 = 5900

爆風が消えていく。俺のフィールド上には何も残っていなかった。モンスターも、さっき俺の伏せていたセットカードも。

「…おい」

「…何ですか？」

「…お前のセットカードは何処へ行った？」

気付かれました。

「ああ、《ブラック・マジシャン・ガール》の攻撃宣言時に《強制脱出装置》を発動して、俺のフィールドにいた《エフェクト・ヴェーラー》を手札に戻しました」

《強制脱出装置》ききみつせいだつしゆつせうぢ

通常罫

フィールド上に存在するモンスター1体を持ち主の手札に戻す。

「なるほどな。そして《ブラック・マジシャン・ガール》の攻撃はダイレクトアタックになった、ということか」

「はい。ですけど…」

「だけど？」

「なんで巻き戻しが発生しなかったんですか？」

「いや、どうせ何か使ったところで攻撃は続行するつもりだったからな」

「あ、なるほど」

「こういう世界じゃそんなのもありなんだ。」

「バトルフェイズを終了し、メインフェイズ2。カードを1枚セツトしてターンエンドだ」

よし、俺のターンだ。

Turn : 4 Player : Ren
Reiji LP : 7500 HAND : 4 2
Ren LP : 5900 HAND : 3 4

「俺のターン、ドロー」

引いたカードはっつと…。

「《調和の宝札》を発動。手札から《ドラグニティ・ファランクス》を落として2枚ドローします」

《調和の宝札》
すじょうわ
じゆいぼ

通常魔法

手札から攻撃力1000以下のドラゴン族チューナー1体を捨てて発動する。

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

…さて、溪谷を使おうと思ったんだけど。なんかセットカードが怖い。《サイクロン》とかの破壊系効果を溪谷にチェーンされると大きなデイスアドバンテージを負ってしまう。

「よし、墓地の《BF - 精鋭のゼピュロス》の効果を発動。俺のフィールド上に表側表示で存在するカード、《竜の溪谷》を手札に戻してこのカードを特殊召喚します」

フィールドを巨大な黒い竜巻が包み込む。それはやがて俺のフィールドに収束し、現れたのはBFの名を冠する精鋭の戦士。
ブラックフェザー

《BF - 精鋭のゼピュロス》
ブラックフェザ
ぜいはい

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1600 / 守1000

このカードが墓地に存在する場合、自分フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を手札に戻して発動する。

このカードを墓地から特殊召喚し、自分は400ポイントダメージを受ける。

「BF - 精鋭のゼピュロス」の効果はデュエル中に1度しか使用できない。

B F - 精銳のゼピュロス 4 ATK / 1600

蓮 LP 5900 - 4000 = 5500

「さらに、俺のフィールドにB Fが存在するので、手札から《B F - 疾風のゲイル》を特殊召喚します」

《B F - 疾風のゲイル》

ブラックフェザー

チューナー（効果モンスター）（制限カード）

星3 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1300 / 守400

自分フィールド上に「B F - 疾風のゲイル」以外の「B F」と名のついたモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

1ターンに1度、相手モンスター1体の攻撃力・守備力を半分にする事ができる。

B F - 疾風のゲイル 3 T ATK / 1300

「今度はレベル7か…」

「レベル4・精銳のゼピュロスにレベル3・疾風のゲイルをチューニング」

4 + 3 = 7

漆黒の翼に導かれ、終焉の龍が目覚めます。

舞い踊りしは深紅の華、劫火を纏いし断罪の薔薇。
シンクロ召喚。解き放て、鮮血の栄華。

「《ブラック・ローズ・ドラゴン》、降臨」

《ブラック・ローズ・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星7/炎属性/ドラゴン族/攻2400/守1800

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に存在するカードを全て破壊する事ができる。

1ターンに1度、自分の墓地に存在する植物族モンスター1体をゲームから除外する事で、相手フィールド上に存在する守備表示モンスター1体を攻撃表示にし、このターンのエンドフェイズ時までその攻撃力を0にする。

ブラック・ローズ・ドラゴン 7 ATK/2400

「黒薔薇、だと…!?!?」

あ、その呼び方なんだ。ちよつと意外。

「《ブラック・ローズ・ドラゴン》の効果を発動、フィールド上のカードをすべて破壊します!」

フィールド上に薔薇の花弁が舞い始める。それらは視界を真っ赤に埋め尽くし…、

ロストエンド・ローゼンクロイツ
「終焉の薔薇十字！」

一瞬のうちに燃え上がり、全てを焼き尽くした。後には当然、何も残っていない。

「召喚権を残してリセットしやがった…！」

…あ、ゲイルの効果使うの忘れてた。別に無効化されなかったから問題ないけど、今度からちゃんと忘れないようにしよう。

「もう一度《竜の渓谷》を発動。効果で《ハリケーン》を落として、デッキから2枚目の《ドラグニティ・ドウクス》を加えます。ドウクス召喚からファランクスマまでいいですか？」

「…いいぜ、続ける」

フィールドがさっきの渓谷に戻り、現れたのは以下略。それじゃ、もう一度。

「レベル4・ドウクスにレベル2・ファランクスマをチューニング」

4 + 2 = 6

我^{われ}紡^{つむ}ぎしは竜^{りゅう}の槍^{やり}、全^{すべ}てを貫^{つらぬ}く神^{しん}竜^{りゅう}の槍^{やり}。
神^{かみ}をも滅^{ほろ}ぼす疾^{しつ}風^{ふう}よ、吹^ふき荒^あれる風^{かぜ}と共^{とも}に在^あれ。
シンク^{しんく}ロ召^{しょう}喚^{かん}。解^とき放^{はな}て、白^{はく}銀^{ぎん}の一^{いっ}閃^{せん}。

「《ドラグニティナイト・ゲイボルグ》、降臨」

《ドラグニティナイト・ゲイボルグ》

シンクロ・効果モンスター

星6 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻2000 / 守1100

ドラゴン族チューナー+チューナー以外の鳥獣族モンスター1体以上

このカードが戦闘を行うダメージステップ時に1度だけ、自分の墓地に存在する鳥獣族モンスター1体をゲームから除外して発動する事ができる。

このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで、ゲームから除外したそのモンスターの攻撃力分アップする。

ドラグニティナイト・ゲイボルグ 6 ATK / 2000

現れたのは殲滅の^{ゲイボルグ}白銀槍の名を冠する竜騎士。

「バトルフェイズ、《ドラグニティナイト・ゲイボルグ》でダイレクトアタック。ダメージ計算時、墓地の《BF - 疾風のゲイル》を除外してゲイボルグの効果を発動。除外したモンスターの攻撃力分だけゲイボルグの攻撃力を上昇させます」

槍が天に掲げられると同時に白竜の周囲に風が宿る。

ドラグニティナイト・ゲイボルグ ATK / 2000 + 1300

|| 3300

「ウィンドボルグ・ディストーション！」

そして、竜騎士が槍を向けると同時に、白竜の口から竜巻が放たれ

た。

「ぐっ…！」

武藤 LP 7500 - 3300 = 4200

ドラグニティナイト - ゲイボルグ ATK / 3300 2000

「カードを1枚セットしてターンエンドです」

さて、ここから押しきれるかな…？

TURN . 4 END PHASE

1st : Reiji mutou

・ LP : 4200 Hand : 2

・ なし。

後攻 : 空見蓮

・ LP : 5500 Hand : 1

・ 《ドラグニティナイト - ゲイボルグ》 ATK / 2000

・ 《竜の渓谷》

・ セット1枚。

t o b e c o n t i n u e d . . .

T D T R ・ J P P 0 0 1 《 はじまり 》 (後書き)

今回の最強コンボ

蓮「はい、今回の最強コンボのコーナーです。記念すべき第1回は、TURN・4で俺が使ったコンボ。やり方はこんな感じですよ」

用意するカード。

《BF - 精鋭のゼピュロス》：墓地に1枚。ライフが400削られることを忘れないように。

《BF - 疾風のゲイル》：手札に1枚。

《ブラック・ローズ・ドラゴン》：1枚。

表側表示のカード：1枚。1ターンに1度だけ使える効果の類なら特によし。

使用可能デッキ。

基本的になんでもOK。ゲイルとゼピュロスを1枚ずつ入れるだけでできるからね。回収カードは《リビングデッドの呼び声》とか《デモンズ・チーン》とかを使えばいいと思うよ。

やり方。

1・表側表示のカード1枚を手札に戻し、墓地の《BF - 精鋭のゼピュロス》を特殊召喚。

2・手札の《BF - 疾風のゲイル》を特殊召喚。このとき、妨害されてもいように忘れずに効果を使っておこう。

3・ゼピュロスにゲイルをチューニング。 4 + 3 = 7

4 ・薔薇様シンクロ召喚。効果発動してフィールド一掃。
5 ・召喚権を使用していない場合はご自由に展開してください。

蓮「とまあ、こんな感じ。フィールドに何も無い場合は、最悪ゲイル通常召喚からでもいけるよ」

蓮「ちなみに、コンボとかがなかった場合は代わりに「今回の最強カード」や「雑談」のコーナーになります。説明はこれぐらいかな。それでは、この辺で。空見蓮がお送りしました」

次回のキーカード

《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》

g o t o n e x t c h a p t e r . . .

T D T R ・ J P P 0 0 2 へ原点にして (前書き)

どうも、クレセントです。

今回は空見蓮 VS 武藤零次の後半戦。武藤先生の切り札は、果たして…!?

7 / 2 2 2 3 : : 3 0

前書き追加、フォーマット統一。

T D T R - J P P 0 0 2 《原点にして》

T U R N . 4 E N D P H A S E

先攻：武藤零次

・ L P : 4 2 0 0 H A N D : 2

・ なし。

後攻：空見蓮

・ L P : 5 5 0 0 H A N D : 1

・ 《ドラグニティナイト - ゲイボルグ》 A T K / 2 0 0 0

・ 《竜の渓谷》

・ セット1枚。

T u r n . 5 P l a y e r : R e i j j i

R e i j j i L P : 4 2 0 0 H A N D : 2 3

R e n L P : 8 0 0 0 H A N D : 4 1

「俺のターン、ドロー！」

先生が勢いよくカードをドローする。

「…なるほどな」

うん？

「手札から魔法カード、《黒魔術のカーテン》を発動！ライフを半

分支払い、デッキから《ブラック・マジシャン》を特殊召喚する！

あー、なるほど。またですか！

《くろまじゅつ黒魔術のカーテン》

通常魔法

ライフポイントを半分払って発動する。

自分のデッキから「ブラック・マジシャン」1体を特殊召喚する。

このカードを発動するターン、自分は召喚・反転召喚・特殊召喚する事はできない。

武藤 LP 4200 X1 / 2 || 2100

「来い、《ブラック・マジシャン》！」

ブラック・マジシャン 7 ATK / 2500

再びフィールドに姿を現した黒魔術師。さっきは薔薇様で飛ばしちやっでごめん。

「さて、さっきはよくも黒薔薇で吹っ飛ばしてくれたな……」

先生が手札から1枚のカードをデュエルディスクのスロットに勢いよく差し込む。…あ、いやな予感。

「『ブラック・マジック《黒・魔・導》！』」

……。

＼（＾Ｏ＾）／

ブラック・マジック
《黒・魔・導》

通常魔法

自分フィールド上に「ブラック・マジシャン」が表側表示で存在する時のみ発動する事ができる。

相手フィールド上の魔法・罫カードを全て破壊する。

フィールド上の時間が、止まった。それほどの大魔法を彼は放ったのだ。そして、ガラスが砕けるような音と共に、《竜の渓谷》のリッドビジョンが壊れ、フィールドは元の会場に戻った。

「俺はカードを1枚セットしてターンエンドだ」

Turn . 6 Player : Ren
Reiji LP : 2100 HAND : 30
Ren LP : 5500 HAND : 12

「俺のターン、ドロー」

うーん、お返しとばかりに持ってかれたな…。セットできるカードも引かなかったし…。

「バトルフェイズ。ゲイボルグでマジシャンを攻撃」

白竜が砲撃の構えに入る。そして、

「ダメージ計さ「リバースカードオープン！」…ですよー」

ま、そうなりますよー。

「《聖なるバリア・ミラーフォース》、発動！」

《^{せい}聖なるバリア・ミラーフォース》

通常罾（制限カード）

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

ブラック・マジシャンが虹色の結界を展開する。白竜の上に乗っていた騎士が慌てて中止の命令を下すも、時すでに時間切れ。

白竜は竜巻を放ち、当然跳ね返され…。

結果、一掃。

「お前、少しは警戒しろよ…」

「いや、予想はしてましたけどね…」

蘇生とかブラホとか普通にブラフセットしてたからね、俺の周りって。

「…はあ。ターンエンド」

Turn : 7 Player : Reiji
Reiji LP : 2100 HAND : 0 1
Ren LP : 5500 HAND : 2 2

「俺のターンだな。ドロ―！」

「…なんかいいカード引きました？」

「いや、今は別についてカードが」

あ、やばい。なんかぐだぐだになってきた。

「バトルフェイズ！《ブラック・マジシャン》でダイレクトアタック！」

魔術師が杖を構える。そして対象は、言うまでもなく俺。

「ブラック・マジック
黒・魔・導！」

一瞬にして、視界が歪み、砕け散る。

「ぐ…あ…！」

蓮 LP 5500 - 2500 = 3000

「俺はこのままターンエンドだ」

Turn : 8 Player : Ren
Reiji LP : 2100 HAND : 1
Ren LP : 3000 HAND : 2 3

「俺のターン、ドロー」

…賭けるしかない、か。

「カードを1枚セットしてターンエンド」

Turn : 9 Player : Reiji
Reiji LP : 2100 HAND : 1 2
Ren LP : 3000 HAND : 3 2

「俺のターン、ドロー！」

先生がカードをドローした。なぜだろう、少しだけカードが光って見えた気が…？

「…さて、そろそろ終わらせようか！」

「…？」

「墓地のモンスターを全てデッキに戻し、《究極封印神エクゾディオス》を特殊召喚する！」

…は？

トトトトトトトトト

…はああ！？

《究極封印神エクゾディオス》
きゅうきょくふういんしん

効果モンスター

星10 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻 ？ / 守 0

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地に存在するモンスターを全てデッキに戻した場合のみ特殊召喚する事ができる。

このカードの攻撃宣言時、手札またはデッキからモンスター1体を墓地へ送る。

自分の墓地に存在する通常モンスター1体につき、このカードの攻撃力は1000ポイントアップする。

このカードはフィールド上から離れた場合、ゲームから除外される。このカードの効果によって「封印されし」と名のついたカードが自分の墓地に合計5種類揃った時、デュエルに勝利する。

究極封印神エクゾディオス 10 ATK / ? 0

「なんでそんなモンスター入ってんですか！」

「…すぐにわかるぜ。《ブラック・マジシャン》と《究極封印神エクゾディオス》をリリース！」

「出番それだけですか!？」

フィールドを覆い尽くすほどの巨大な魔法陣が現れ、黒魔術師と唯一神の化身がその中心に入る。

すると、魔法陣は収縮を開始し、それに伴ってより強く輝き始める。

やがて魔法陣は一点に収束し、その光の中から出てきたのは。

「マジックエロオアオア・ブラック
《黒の魔法神官》 召喚！」

生きた伝説が、全ての魔術を極めた黒魔術師が、そこにいた。

マジックエロオアオア・ブラック
《黒の魔法神官》

効果モンスター

星9 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻3200 / 守2800

(テキストの確認に失敗しました)

黒の魔法神官 9 ATK / 3200

…!!

テキストが…読めない…!?

「マジックエロオアオア・ブラック
《黒の魔法神官》…!」

「さあ、覚悟はいいな？」

魔法神官の効果って、いつたい…？

「行くぜ、バトルフェイズだ！」

先生の攻撃宣言の直前、反射的に俺の手が動いた。

「待ってください！メインフェイズ終了時、手札から《エフェクト・ヴェーラー》の効果を発動します！」

「何!？」

神官が杖を構える直前に、さっきの羽衣を纏った少女が現れた。少女が神官の足元に光の珠を放つと、そこから光があふれ始める。その光は僅かながら、確かに杖の輝きを濁らせた。そして、俺の方を振り向き、笑顔を見せて消えていった。

『さっきは助けてくれて、ありがとう!』

…あれ、幻聴が…？

とにかく、今俺に出来ることはこれしかなかった。俺のセットカードは1枚。後は相手の行動次第だが…？

「…まあ、いいか。ターンエンドだ」

…ふう。とりあえず一命は取り留めたのかな？

Turn : 10 Player : Ren
Reiji LP : 2100 HAND : 2 0
Ren LP : 5500 HAND : 1 2

「ふう……。俺のターン、ドロー」

恐らく最後のターン、俺は恐る恐る手札を確認した…。

「…！」

…勝った。

「…《ドラグニティ・アキュリス》を召喚」

現れたのは槍に似た小型の赤い竜。今回、こいつには小さな、しかし重要な役目してもらう。

ドラグニティ・アキュリス 2T ATK / 1000

ここで重要なのはアキュリスの効果、攻撃力、レベル2のチューナーであること、それらには今回は何の意味も持たない。そう…、

「《ドラグニティ・アキュリス》をゲームから除外」

「除外、だと…？」

それが”ドラゴン族”であれば、それでいい。

天空に漆黒の魔法陣が現れる。そしてアキュリスが魔法陣に向かって飛び立ち、勢いよく潜り抜けた。同時に魔法陣は闇に覆われ、そして竜の姿へと。

闇の中から真紅の光が放たれる。闇は漆黒の鎧となり、はつきりとその姿を現した。その竜の名は…、

「頼んだよ、《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》！！」

《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》
効果モンスター

星10/闇属性/ドラゴン族/攻2800/守2400

このカードは自分フィールド上に表側表示で存在するドラゴン族モンスター1体をゲームから除外し、手札から特殊召喚する事ができる。

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に手札または自分の墓地から「レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン」以外のドラゴン族モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン 10 ATK/2800

「レッドアイズの効果。1ターンに1度、手札か墓地からドラゴン族モンスターを特殊召喚する。墓地から《ドラグニティナイト・ゲイボルグ》を特殊召喚！」

レッドアイズの咆哮が会場に轟く。それに応えるかのように突然俺

の後ろから風が吹いた。俺が振り向くと、そこには白銀の槍竜が。

ゲイボルグ

ドラグニティナイト - ゲイボルグ 6 A T K / 2 0 0 0

「…ここまで、か」

「バトルフェイズ！《ドラグニティナイト - ゲイボルグ》で《黒の魔法神官》を攻撃！シルバーストーム！」

エロファンサ・ブラック

マジック・ハイ

白銀の竜が口から竜巻を放つ。それを魔法神官が結界を張って防ぐ。それを見て、竜騎士が槍を構えた。

「ダメージ計算時、ゲイボルグの効果を発動。墓地の《BF - 精鋭のゼピュロス》をゲームから除外し、攻撃力を1600加算！」

ドラグニティナイト - ゲイボルグ A T K / 2 0 0 0 + 1 6 0 0

|| 3 6 0 0

「貫け、ウィンドボルグ・ディストーション！」

竜騎士が結界に槍を穿つ。その効果で漆黒に染まった槍は結界を一撃で破壊した。当然、それに防がれていた竜巻は勢いを取り戻し、そのまま魔法神官を切り刻んだ。

「くっ…」

武藤 L P 2 1 0 0 - 4 0 0 || 1 7 0 0

「空見！」

突然、先生が俺の名前を呼ぶ。

「お前とのデュエル、楽しかったぜ!!」

その顔は、自分の負けが決まったにもかかわらず、笑顔だった。

「はい、こちらこそありがとうございます!」

そして俺もまた、笑顔だったのだろう。

「《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》でダイレクトアタック!」

いつかまた、先生とデュエルがしたい。

「ホーリーダーク・メガフレア!!!」

俺は心から、そう思った。

武藤 LP 1700 - 2800 "

0

- DUEL END -

WINNER: Ren Sorami

(. .)

会場外のロビーにあるベンチ。試験後、デュエルディスクを返却した俺はそこに座っていた。

「ふう…」

実はあの後、すぐに実技の点数が出た。

No. 172 空見 蓮 284 / 300 pts .

先生が言うには、筆記試験とは別に実技で150点以上取れば合格なんだそう。つまり、合格。筆記試験は寝たのに。

「これで合格って…」

普通なら、これで合格なんてありえない。いや、逆にこの世界が異

常であることの証明にはなる。この世界は、本当に異世界で間違いないだろう。

「…あ」

ふと、ガラス張りになって壁から外の世界が目に入る。

「…雪だ」

雪が降っていた。それも、風景を白く染め上げて。

それはかつて、クリスマスに病院のベッドで目を覚ましたあの時。

あの日、奇跡的に目を覚ました日の外の景色にとっても似ているような気がして。

いや、むしろそうであるような気がして。

「…やっぱり俺、死んだのかな…?」

不思議と、悲しみは湧いてこなかった。いつからだっただろうか、俺が死に対する恐怖を感じなくなってしまったのは…。

『泣いてる、の?』

突然、少女の声が俺の耳に入る。声のした方を見ると、そこには黒くてきれいな髪をした、真紅眼の少女が俺の後ろに立っていた。

…そう、この時の俺は。いや、俺たちは知らなかった。

俺とこの少女が、まさか世界を救うことになるなんて。

t o b e c o n t i n u e d . . .

T D T R ・ J P P 0 0 2 〈原点にして〉 (後書き)

今回の最強カード

蓮「はい、今回の最強カードのコーナーです。早速コンボが出なかった事態に直面した結果のこれですよ。というわけで、第1回のカードはこれ」

マジックエロオアオア・ブラック
《黒の魔法神官》

効果モンスター

星9 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻3200 / 守2800

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に存在するレベル6以上の魔法使い族モンスター2体を生け贄に捧げた場合のみ特殊召喚する事ができる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、罠カードの発動を無効にし破壊する事ができる。

蓮「…あー。だからあの時先生は攻撃をやめたのか…。というわけで、第1回はTURN・9で先生が召喚した切り札、《黒の魔法神官》。召喚条件はレベル6以上の魔法使い族モンスター2体のリリースという何とも難しいもの。しかし、その分…いや、それ以上に強力な効果を持つてるんだ。簡単に言うと、ノーコストで撃てる《盗賊の七つ道具》。同じターンどころか、同じチェーン上でも使用制限なしで撃てる。現環境でこのモンスターの召喚に成功したらだいたいの相手は防ぐことを許されずにやられるだろうね。だけど、1つだけ欠点がある。それは、「この効果はスペルスピード2」だということ。つまり、カウンター罠に対してはチェーンできないから気をつけてね」

蓮「それでは、この辺で。空見蓮がお送りしました」

次回のキーカード

《（まだ決めてません）》

蓮「ちよ、それでいいの!?!」

g o t o n e x t c h a p t e r . . .

T D T R ・ J P P O O 3 いろいろと邂逅 (前書き)

どうも、クレセントです。

今回は、合格発表…の前に、とある人物とのデュエルとなります。
その相手とは…？

7 / 2 2 2 3 : 4 0

前書き追加。後、微調整。デュエルには影響なし。

「泣いてる、の？」

俺の後ろから声がかかる。振り向くと、そこには真紅色の瞳をした黒髪の少女がいた。

「うっん、大丈夫」

「そう？よかった…」

彼女が安心したように笑みをこぼす。

「…あれ、受験は？」

「…受験？何の？」

「はい？」

そういえば、彼女の左腕には黒いデュエルディスクが装備されていた。赤いコアを中心に水晶でできた漆黒の翼が広がられている。この実技試験では、ディスクの改造による不正を防止するため、アカデミアが用意したディスクを用いてデュエルを行う。そのため、もしデュエルディスクを持っている場合は受験前に預けることになる。

なのに、彼女の付けているディスクはそれとは明らかに形状が異なっている。つまり、彼女は受験生ではないのかな？

「ねえ、デュエルしない？」

俺が無意味に考えを張り巡らせていると、少女から声がかかった。

「え？ああ、別にいいけど」

「やった！それじゃ、すぐに始めよう！」

「わかった。それじゃ、こっちに座って」

「うん！」

…あ、そうそう。俺、デュエルディスク持ってません。だから、ベ
ンチの左右に座ってデュエルですよ。

「あ、私はクレナ。クレナニヴァーミリオンだよ！」

「俺は空見蓮。蓮って呼んでくれればいいよ」

「わかった！よろしくね、蓮！」

「こちらこそよろしくね、クレナ。それじゃ、」

「デュエ」見つけたあああああああ！」「！？」「」

突如、誰かの声が響いた。慌てて声のした方を向くと、そこにいたのは金髪のロングヘアを後ろで結んだ少女。背はクレナと同じくらいかな？

「あ、ユグドラ。どうしたの？」

「はあ、はあ、ど、どうしたのじゃないわよ！ 溪谷が今にも攻め込まれそうなの！ 今すぐ戻ってきてってスルトが！」

「わ、わかった！ ごめんね、蓮！ デュエルはまた今度！」

「あ、うん。またね」

「行くよ、クレナ！」

「うん！ じゃあね、蓮！」

そういうと、ユグドラと呼ばれた少女はクレナを連れて（というか、手を引っ張って）来た道を引き返して行った。

…本当に、何だったんだろ？

(. . .)

『以上をもちまして、実技試験を終了いたします。1時間後に合格発表を行いますので、それまでを自由時間とします』

試験終了のアナウンスがこの建物全体に流れる。…いや、時計見たらもう3時なんです。午前の。ここから1時間って何考えてるのさ…。辺りを見渡すと、眠たそうにしてる人、そうでない人、さらには既に眠ってしまった人までいる。仮眠室の案内があったのはこのためだったのか。寝とけばよかった…。

「ふあ…」

まあ、そんなわけで、眠いです。約12時間起きっぱなしですよ。全く、実技の受験1番手だったせいで終わった後すごい暇だったからね…。

「あー、やっと終わったかー！」

「さすがに疲れたわね…。遊人以外はみんな負けちゃったし…」

「むしろ勝ったのは全受験生中2人だけ、か…。てか、あの實力はおかしいだろ…！」

「寝てきていいかな、お兄ちゃん…。もう…朝3時だよ…。」

後ろから何か聞こえてきた。怪しまれるといけないから振り向かないけど、後ろで4人の少年少女が雑談をしているようです。3人眠そうにしてるけど。

「そういえば、もう1人って誰なんだ？」（1人目/ユウト）

「…遊人、あんた見てなかったの？」（2人目）

「あきらめる理央。いつものことだ」（3人目/4人目の兄）

「…はあ。全く、もう一人は空見蓮^{そらみれん}。確か、《竜の渓谷》ってフィールド魔法を軸にしたドラグニティ使いよ」（2人目/リオ）

「…理央ちゃん、1回見ただけなのになんでそこまでわかるの…？」
（4人目）

「…フィリア。お前…わからなかったのか」(3人目)

「やめてお兄ちゃん！なんで私をそんな目で見るの!？」(4人目
/フィリア)

…行っちゃった。俺、そこそ有名になっちゃってるみたい。そんなつもりなかったのに。

結果発表まではあと1時間。…寝よう。

(. . .)

『まもなく試験結果の発表を行います。受験生の皆さんは、会場にお戻りください』

…あ、おはようございます。蓮です。

これから結果発表だそうです。というわけで、会場に行ってきました。

(. . .)

会場の観客席に座ると同時に電気が落ちた。

そして、その中央にある舞台(実技試験でデュエルした場所)にスポットライトが当たる。そこにいたのは、試験官の武藤先生だった。

「長かったこの入試試験も結果発表を残すだけだ。お前ら、本当にご苦労だったな」

先生の声が会場に響く。

「それじゃあ早速…と言いたいところなんだが、その前に」

ん？

「デュエルアカデミア入試試験恒例のエキシビジョンマッチを行う！」

会場が一瞬で歓声に包まれた。てゆーか、え？なにそれ？聞いてないよ？

「対戦カードは実技試験上位2名の対決！その雄姿を、しかとその目に焼き付ける！」

…うおー。

「絶対的な攻撃力と属性融合で相手を圧倒する！その実力でアカデミア開校史上、実技最高得点を叩き出した！英雄を束ねし勇者、桜井遊人！！」

向かい側の席にスポットライトが移る。そこにいたのは、濃い緑髪の少年。

「よっしゃあー！」

あ、さつき雑談しながら通り過ぎてった人だ。それにしても彼が実技1位か…。見るからに主人公、それだけ説明がつくぐらいの主人公らしさだ。

「対するは、圧倒的な展開力とシンクロ召喚でフィールドを制圧する！その速さは留まることを知らない！天を統べる竜騎士、空見蓮そらみれん！！！」

…俺にスポットライトが集中する。まさかとは思ってたけど…。

「…はい」

実技2位って、俺だったんだ…。

(・・・)

俺と桜井君が客席から同時に飛び降りた。同時に、会場全体が一時的に明るくなる。そして、教員から渡されたデュエルディスクを装着する。俺はカバンからデッキを取り出し、そのディスクにセットした。

「空見、だったか？」

「あ、うん」

向こう側にいる桜井君が話しかけてきた。彼が実技試験1位…。

「俺は桜井遊人。遊人でいいぜ。よろしくな！」

「俺は空見蓮。こつちも蓮でいいよ」

「準備はいいか、お前ら！」

武藤先生の声が響く。

「ああ、いつでもいいぜ！」

「こつちも大丈夫です！」

さあ、始めよう！

「エキシビジョンマッチ、開始！」

「デュエル！！」

(. .)

「先攻はもらっぜ！ドロー！！」

あ、持ってかれた。

1st	Yuto	Sakurai	LP	4000
2nd	Rensou	Rami	LP	4000

Turn・1 Player: Yutto
Yutto LP 4000 H5 6
Ren LP 4000 H5 5

「俺は《E・エマーゼンシーコール》を発動！《E・HERO エアーマン》を手札に加える！」

”英雄を束ねし勇者”ってそういうことか…。彼のデッキは【E・HERO】。しかも、マンガ版の方だ。

《E・エマーゼンシーコール》

通常魔法

自分のデッキから「E・HERO」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

「そして、《E・HERO エアーマン》を召喚！」

現れたのは扇風機のついた翼を持つヒーロー。その効果の強力さから、速攻で制限カードになったらしい。

《E・HERO エアーマン》

効果モンスター（制限カード）

星4 / 風属性 / 戦士族 / 攻1800 / 守 300

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、次の効果から1つを選択して発動する事ができる。

自分フィールド上に存在するこのカード以外の「HERO」と名

のついたモンスターの数まで、フィールド上に存在する魔法または罠カードを破壊する事ができる。

自分のデッキから「HERO」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

E・HERO エアーマン 4 ATK/1800

「エアーマンの効果発動！デッキから《E・HERO オーシャン》を手札に加える！」

遊人がデッキから1枚のカードを取り出した。

「カードを1枚セットしてターンエンドだ」

よし、俺のターンだね。

Turn・2 Player:Ren
Yuto LP 4000 H6 5
Ren LP 4000 H5 6

「俺のターン、ドロー」

手札を確認して…よし。

「《竜の渓谷》を発動」

フィールドが茜色に染まり、見慣れた景色に変わる。

「溪谷の効果。手札の《ドラグニティ・フアランクス》を落として、デッキから《ドラグニティ・ドウクス》を手札に加える。そしてそのまま召喚」

天空から白い服を纏った鳥人が舞い降りた。手に持っているのは…はたき？違うんだろうけど俺にはそれにしか見えない。

ドラグニティ・ドウクス 4 ATK / 1500 1700

「ドウクス効果。墓地のフアランクスを装備。さらにフアランクス効果で自身を特殊召喚」

鳥人が金色の槍を手に取り、そのまま天に放り投げた。すると、槍は小さな竜になってドウクスの横に並んだ。

ドラグニティ・フアランクス 2T DEF / 1100

「早速来るのか！」

…そうだな。今回はこっちで行こう。

「レベル4・ドウクスにレベル2・フアランクスをチューニング」

4 + 2 = 6

我^{われ}紡^{つむ}ぎしは竜^{りゅう}の槍^{やり}、全^{すべ}てを貫^つく神^{しん}竜^{りゅう}の槍^{やり}。
刹^{せつ}那^なに響^{ひび}く雷^{らい}鳴^{めい}よ、吹^ふき荒^あれる風^{かぜ}と共^{とも}に在^あれ。
シンク^{しんく}口^{こう}召^{しょう}喚^{かん}。解^{はな}き放^{はな}て、金^{こん}色^{じき}の神^{しん}雷^{らい}。

「《ドラグニティナイト・ヴァジュランダ》、降臨」

《ドラグニティナイト・ヴァジュランダ》

シンクロ・効果モンスター

星6 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻1900 / 守1200

ドラゴン族チューナー+チューナー以外の鳥獣族モンスター1体以上このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル3以下の「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。

1ターンに1度、このカードに装備された装備カード1枚を墓地へ送る事で、このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで倍になる。

朱色の飛竜、雷閃ヴァジュランダの黄金槍。長い尾をもつその竜は、【ドラグニティ】において重要な位置を占めている。

ドラグニティナイト・ヴァジュランダ 6 ATK / 1900

「《ドラグニティナイト・ヴァジュランダ》の効果を発動。墓地に存在するドラゴン族・レベル3以下のドラグニティを装備する。もう一度ファランクスを装備」

天空から落ちてきた槍を竜騎士が華麗に掴む。そして、

「ファランクスの効果で特殊召喚」

槍天に掲げられると、光を放ちながら幼竜へと姿を変えた。

ドラグニティ・ファランクス 2 T DEF / 1100

「またシンクロか!？」

「もちろん。レベル6・ヴァジュランダにレベル2・ファランクスをチューニング」

6 + 2 = 8

竜騎の絆がまた一つ、新たな奇跡を紡ぎだす。
夜空に瞬く綺羅星よ、その輝きで、我らを導け。
シンクロ召喚。解き放て、流星の神光。

「《スターダスト・ドラゴン》、降臨」

《スターダスト・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星8 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻2500 / 守2000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罫・効果モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。

この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、この効果を発動するためリリースされ墓地に存在するこのカードを、自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

スターダスト・ドラゴン 8 ATK / 2500

星の光を身に纏った白銀の竜。その輝きは、見る者全てを魅了させる。

…とか中二病的なこと言ってみただけど、実際ソリッドビジョンに映し出されたその姿は本当に綺麗だ。

「すげえ…！」

「バトルフェイズ、スターダストでエアーマンを攻撃。シューティング・スターダスト！」

スターダストが天空に舞い上がる。そして、白銀の竜を纏うように星の光が湧いて…

「^{バースト}降り注げ！」

エアーマンに向けて、一斉に照射した。その光は一瞬で風の英雄を消し去り、遊人にも衝撃を与える。

「くっ！」

遊人 LP 4000 - 7000 = 3300

「この瞬間、トラップ発動、《ヒーロー・シグナル》！デッキから《E・HERO フォレストマン》を特殊召喚するぜ！」

あ、やばい。

《ヒーロー・シグナル》

通常罫

自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる。

自分の手札またはデッキから「E・HERO」という名のついたレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する。

スターダストに立ち塞がるかのように現れた森の英雄、フォレストマン。その木でできた右腕は森の加護を受けている証だろう。

《エレメンタルヒーロー
E・HERO フォレストマン》

効果モンスター

星4/地属性/戦士族/攻1000/守2000

1ターンに1度、自分のスタンバイフェイズ時に発動する事ができる。

自分のデッキまたは墓地に存在する「融合」魔法カード1枚を手札に加える。

E・HERO フォレストマン 4 DEF/2000

…しまったな。次のターンで融合が確定しちゃった。でもまあ、とりあえずは…。

「カードを2枚セットしてターンエンド」

さあ、どう来る…？

Turn · 2 END PHASE

1st: Yuto Sakurai

・ LP: 3300 HAND: 5

・ 《E・HERO フォレストマン》 DEF/2000

・ セットなし。

2nd: Ren Sorami

・ LP: 4000 HAND: 2

・ 《スターダスト・ドラゴン》 ATK/2500

・ 《竜の渓谷》

・ セット2枚。

t o b e c o n t i n u e d . . .

T D T R ・ J P P O O 3 《いろいろと邂逅》（後書き）

今回の最強カード

蓮「はい、どうも。今回の最強カードのコーナーです。今回はこのカード。」

《E・HERO エアーマン》

効果モンスター（制限カード）

星4 / 風属性 / 戦士族 / 攻1800 / 守 300

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、次の効果から1つを選択して発動する事ができる。

自分フィールド上に存在するこのカード以外の「HERO」と名のついたモンスターの数まで、フィールド上に存在する魔法または罫カードを破壊する事ができる。

自分のデッキから「HERO」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

蓮「Turn・1で遊人が召喚した風のヒーロー、エアーマン。召喚・特殊召喚に成功したときにデッキからHEROを手札に加えることができるんだ。自身もサーチできるから、登場して間もないころはその効果の強力さから【E・HERO】でもないのにデッキに3積みされてたんだって。その結果、E・HERO唯一の制限カード入り。仕方ないね。あ、そうそう。忘れられやすいんだけど、デッキからHEROを持つてくる代わりにフィールド上の魔法・罫カードを破壊することもできるよ。この破壊効果は対象を取らないから覚えといてね。それじゃ、この辺で。次回、俺の世界には無かったカードが…!?!?」

次回のキーカード

《ヒーローズリアクト》

g o t o n e x t c h a p t e r . . .

T D T R - J P P 0 0 4 へまさに超展開 (前書き)

遅くなつてすいませんでした。どうも、クレセントです。

今回は蓮VS遊人の続きです。

どうしてこうなつた。

7 / 1 9 1 3 : 5 5

文章の書き忘れを修正。

7 / 2 2 2 3 : 5 0

致命的な致命傷になりうるプレイミスを修正。

T D T R - J P P 0 0 4 へまさに超展開

Turn . 2 3

1st : Y u t o S a k u r a i

・ L P : 3 3 0 0 H A N D : 5

・ 《E・HERO フォレストマン》 DEF / 2000

・ セットなし。

2nd : R e n S o r a m i

・ L P : 4 0 0 0 H A N D : 2

・ 《スターダスト・ドラゴン》 ATK / 2500

・ 《竜の渓谷》

・ セット2枚。

Turn . 3 P l a y e r : Y u t o

Y u t o L P : 3 3 0 0 H A N D : 5 6

R e n L P : 4 0 0 0 H A N D : 6 2

「俺のターン、ドロー！」

遊人が勢いよくカードをドローした。

「スタンバイフェイズ、フォレストマンの効果発動！デッキから《融合》を手札に加える！」

《融合》
カウイング

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

…来るか。

「メインフェイズ、《融合》を発動！フィールドの《E・HERO フォレストマン》と手札の《E・HERO オーシャン》を融合
！」

遊人の背後から海のE・HERO、オーシャンが飛び出し、フォレストマンと共に上空へと飛んだ。

エレメンタルヒーロー

《E・HERO オーシャン》

効果モンスター

星4 / 水属性 / 戦士族 / 攻1500 / 守1200

1ターンに1度、自分のスタンバイフェイズ時に発動する事ができる。

自分フィールド上または自分の墓地に存在する「HERO」と名のついたモンスター1体を選択し、持ち主の手札に戻す。

上空に大きな渦が現れ、2人のヒーローはその中に飛び込んだ。そして、その渦から現れたのは…

「来い！《E・HERO ジ・アース》！！」

エレメンタルヒーロー

《E・HERO ジ・アース》

融合・効果モンスター

星8 / 地属性 / 戦士族 / 攻2500 / 守2000

「E・HERO オーシャン」+「E・HERO フォレストマン」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

自分フィールド上に表側表示で存在する「E・HERO」と名のついたモンスター1体をリリースする事で、このカードの攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで、リリースしたモンスターの攻撃力分アップする。

E・HERO ジ・アース 8 ATK / 2500

「ジ・アース
地球…！！」

「さらに、手札から《ミラクル・フュージョン》を発動！墓地の《E・HERO フォレストマン》と《E・HERO オーシャン》を融合！」

また融合！？

《ミラクル・フュージョン》

通常魔法

自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、「E・HERO」という名のついた融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。

(この特殊召喚は融合召喚扱いとする)

《ミラクル・フュージョン》のカードが虹色の渦を作り出す。そして、その渦から飛び出してきたのは。

「来い！ 《E・HERO アブソルトZero》！！」

《E・HERO アブソルトZero》
エレメンタルヒーロー

融合・効果モンスター

星8 / 水属性 / 戦士族 / 攻2500 / 守2000

「HERO」と名のついたモンスター + 水属性モンスター

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの攻撃力は、フィールド上に表側表示で存在する「E・HERO アブソルトZero」以外の水属性モンスターの数×500ポイントアップする。

このカードがフィールド上から離れた時、相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

E・HERO アブソルトZero 8 ATK / 2500

遊人の場に並び立つ、ジ・アースとアブソルトZero。この布陣は、まさか…！？

「ジ・アースの効果発動！Zeroをリリースし、その攻撃力分だけジ・アースの攻撃力を上昇させ「止めるよ」るえ！？」

絶対零度の英雄が姿を氷の剣へと変えていく。そして、それをジ・アースが手に取るうとしたとき。

「な…!？」

少女の放った光の珠が、絶対零度の剣を消滅させた。

「手札の《エフェクト・ヴェーラー》を墓地へ送り効果発動。ジ・アースの効果をエンドフェイズまで無効にするよ」

役目を終えた少女は、俺に笑顔を見せて消えていった。

「…ちえ、ワンキルは無理か」

え、今なんか怖いセリフ聞こえたんだけど。

「だが、アブソルートZeroの効果は発動だ！このカードがフィールドを離れた時、相手モンスターをすべて破壊する！」

砕けた氷の剣から冷気があふれだす。

「まあ、無効化するだろ？」

「もちろん。スターダストの効果発動。自身をリリースし、フィールド上のカードを破壊する効果を無効にして破壊する。スターライト・リフレクション」

スターダストが光の粒子を纏い、砕けた剣の欠片を包み込む。そして、それらは天へと消えた。あとには何も残らない。

「バトルフェイズだ！ジ・アースでダイレクトアタック！」

ジ・アースの右手に光が宿り、そこから一筋の光が描かれる。その光は剣の形を成し、彼の手に収まった。

「クリア・デイバインド地・球・晴・天・斬！！」

そして、ジ・アースの放った白い剣閃が俺の体を切り裂く。

「くっっ…！！」

蓮 LP 4000 - 2500 = 1500

「カードを2枚セットしてターンエンド！」

きつついなー。

…あ、忘れるところだった。

「エンドフェイズ、スターダストは自身の効果で帰還します」

フィールド上に降り注ぐ光。そして、それとともに帰還する白銀の竜。

「うわ、そいつのこと忘れてた！！」

あ、やっぱり？大丈夫、俺もだから。

Turn・4 Player:Ren

Y u t o L P : 3 3 0 0 H A N D : 6 2
R e n L P : 1 5 0 0 H A N D : 1 2

「俺のターン、ドロー」

引いたカードは……おー？

「溪谷効果。手札の《BF - 精鋭のゼピュロス》を落として《ドラグニティ - アキュリス》を手札に加える」

《ドラグニティ - アキュリス》

チューナー（効果モンスター）

星2 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻1000 / 守 800

このカードが召喚に成功した時、手札から「ドラグニティ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚し、このカードを装備カード扱いとして装備する事ができる。

モンスターに装備されているこのカードが墓地へ送られた時、フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊する。

「さらに、墓地の《BF - 精鋭のゼピュロス》の効果。《竜の溪谷》を回収して特殊召喚」

フィールドを黒い竜巻が包み込む。それが消えたとき、現れたのはBFの精鋭。そして、色々なデッキに出張してる鳥人。

BF - 精鋭のゼピュロス 4 A T K / 1 6 0 0

「こいつが、理央が知らないって言ってたBF……！」

ブラックフェザー

「続けるよ。もう一度《竜の渓谷》を発動。効果でアキュリスを落としてレギオンを持つてくるよ」

竜巻に荒らされたフィールドが元の渓谷に戻る。

「レギオン？」

あ、この世界では初登場だっけ。

「そして《ドラグニティ・レギオン》を召喚」

ナツクルを装備した緑翼の鳥人が現れた。攻撃力はドウクスに劣るものの、強力な効果を備えている。

《ドラグニティ・レギオン》

効果モンスター

星3 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻1200 / 守 800

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル3以下の「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。

自分の魔法＆罠カードゾーンに存在する「ドラグニティ」と名のついたカード1枚を墓地へ送る事で、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を破壊する。

ドラグニティ・レギオン 3 ATK / 1200

「レギオン効果。墓地のアキュリスを装備するよ」

レギオンの手元に一本の赤い槍が出現する。彼はそれを手に取り、投げる構えに入った。

「レギオンのもう一つの効果を発動。装備されたアキュリスを墓地へ送って、相手フィールド上の表側表示モンスターを破壊する」

「何!?!」

「ジ・アースを破壊。スパイラル・タービュランス!」

レギオンが真紅の槍を放つ。投げられると同時に槍は一筋の光となり、ジ・アースを貫いた。

「ジ・アース…!」

「そして、墓地に送られたアキュリスの効果で、フィールド上のカード1枚を破壊する」

ジ・アースを破壊した赤い槍がフィールド上に滞空する。

「そつちのセットカードを破壊。スカーレット・ニードル!」

そして、セットカードに狙いを定め、貫いた。

「…発動タイミングはこれで正解みたいだな」

フィールドには、確かに真紅の光がカードを貫いていた。

…ただ、表になった、そのカードを。

「チエーン発動、《ヒーローズ・リアクト》！俺のフィールドにいるE・HEROが破壊されたとき、ライフを半分支払うことで破壊されたモンスターを呼び戻す！」

聞いたことのないカード…。いや、俺が知らないだけかもしれないけどさ。

《ヒーローズ・リアクト》

通常罾（オリジナル）

自分フィールド上に存在する「E・HERO」と名のついたモンスターが破壊された時、ライフポイントを半分払って発動する。

そのモンスターを召喚条件を無視して特殊召喚する。

その後、お互いのプレイヤーはデッキからカードを1枚ドロウする。発動後、このカードはゲームから除外される。

遊人 LP 3300x1/2 1650

「戻ってこい、ジ・アース！」

遊人のフィールドに再び姿を現したジ・アース。これでレギオンの効果が完全に無駄になってしまった。

「で、1枚ドロウだっけ？」

「ああ、お互いにな」

そういつて遊人はデッキからカードをドロ―した。俺もカードをドロ―。

…あ。

「よし、《死者蘇生》を発動。墓地のアキュリスを蘇生するよ」

「ここで来るのか…！」

《死者蘇生》。まさかこのタイミングで引くとは思ってなかった。このセットカードはまだ使わないでおこう。

そして、現れたのは鎧を装備した小さな赤い竜。

ドラグニティ・アキュリス 2 T DEF / 800

「って、そいつもチューナーかよ!？」

「もちろん」

下級のドラゴン族ドラグニティはみんなチューナーだからね。

「それじゃ、レベル3・レギオンとレベル4・ゼピュロスにレベル2・アキュリスをチューニング」

「3と4と2…レベル9!？」

3 + 4 + 2 = 9

我^{われ}紡^{つむ}ぎしは竜^{りゅう}の槍^{やり}、全^{すべ}てを貫^{つらぬ}く神^{しん}竜^{りゅう}の槍^{やり}。
神^{かみ}をも滅^{ほろ}ぼす終^{しゅう}焉^{えん}よ、凍^いてつく吹^ふ雪^{ぶき}と共^{とも}に在^あれ。
シンクロ召喚^{しょうかん}。解^{はな}き放^{はな}て、災^{さい}厄^{やく}の結^{けつ}末^{まつ}。

「《氷結界の龍 トリシューラ》、降臨」

《氷結界の龍 トリシューラ》

シンクロ・効果モンスター（制限カード）

星9 / 水属性 / ドラゴン族 / 攻2700 / 守2000

チューナー+チューナー以外のモンスター2体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手の手札・フィールド上・墓地のカードをそれぞれ1枚までゲームから除外する事ができる。

茜色に染まった溪谷に突如吹雪が吹き荒れる。

その吹雪は一段と強くなり、視界を真っ白に染め上げる。

「あれ？」

…ちょっと待って何かさむっ！これほんとにソリッドビジョンだよ
ね！？

我が眠りを妨げし者よ

吹雪の中、突然誰かの声がかすかに聞こえた。声質からして、老人
みたいだけど…？

汝、力を求むか

……誰？

我が名はトリシューラ

氷結の境界に眠りし式神

俺は…蓮。空見蓮。

そうか

汝が、竜騎の伝承者か

竜騎…ドラグニティのこと？

ならば、汝の求むべき力は一つだ

吹雪が一段と強くなる。気付くとそこに、……

「…ちよ!?!?」

…俺の立っているべき床が、無かった。

あれ、ちよつと待って。何この超展開。こんな原作にあつた? いや桜井遊人が主人公のアニメとか無かつたしそれでも俺飛ばされてきてるから世界の修正力とかが働いてるのかもしれないけどだってこんな世界飛ばすなっていうことでそれよりも現在進行形で落ちてるから間もなく俺死ぬと思われちよつと待てこーいう死にかたはさすがに二度目は慣れてると言いますか誰だ俺を空中に落としたのはああああ!?!」

Ren Clena

まったく、スルトの奴め…。ユグドラが慌てて呼びに来たから何かと思ったら…。

「よし、4人そろつたな。それじゃ、始めるぞ…麻雀を」

「」「」そのためにわざわざ緊急招集かけないでくれませんか!?!?」「」

麻雀の人数が足りないからって何でそういうことするのかな…！

そんなわけで、クレナ・ヴァーミリオンは氷結界の里にいる親友の家に遊びに行ったのだった…と。

「ふう…」

というわけで、その親友のいる神社に来たわけだけど…。

「……蓮？」

まさかあの時の人が、こんなところに倒れてるなんて、思ってもいなかったわけでした。

t o b e c o n t i n u e d . . .

T D T R - J P P 0 0 4 へまさに超展開 (後書き)

今回の雑談：T D T R - J P B 0 1 《消えたデュエリスト》

フィールドに強烈な吹雪が吹き荒れる。これが、レベル9シンクロの力なのか…!?

「すげえ…!」

「ドラグニティ」というカードシリーズは今まで見たことがなかった。それに、理央が知らない知らないというBF、精鋭のゼピュロスまで持っていた。アカデミアに入学したら真っ先にデュエルがしたい、そう思っていた相手と今こうしてデュエルしている。

お互いのライフが2000を切った。そろそろこのデュエルも終わってしまうのだろう。そして、今フィールドに吹雪を巻き起こしてるとりなんとかというモンスターがあいつの切り札なんだろう。

『フィールド内に物理的障害が発生。デュエルを中断し、ソリッドビジョンシステムを終了します。繰り返します。フィールド内に…』

…は?なんだよ、今いいところなのに。

ソリッドビジョンシステムがストップし、俺の目の前にいるジ・アース、あいつのフィールドにいるスターダストが消えていく。そして、とりなんとかの吹雪も…。

…あれ？

吹雪が、収まらない。

「…ちょ！？」

吹雪の向こうから蓮の声が聞こえた。

「おい、大丈夫か！？」

「……」

吹雪の勢いが弱まっていく。やがてそれが収まったとき…、

「…はあ！？」

あいつの姿は、どこにもなかった。

g o t o n e x t c h a p t e r . . .

工事中

どうも、クレセントです。

毎度のことながらすいません。タイトル通り、工事中でございます。というのも、話の展開についていけないという意見を感想欄に1つ、あとリア友からのベ7件ほどいただいたので、話の筋が通るように改訂を行います。

対象はT D T R - J P O O 4以降。L C M Aはアカデミア入学後のストーリーになる予定です。

自分でも身勝手な行動であるとわかっています。ですが、読者の皆さま方により良い作品を提供したいとも思っています。

ご理解とご協力、よろしくお願いします。

感想欄への苦情は大歓迎でございます。皆さん、奮ってご記入ください。

それでは、この辺で。クレセントでした。

T D T R - J P P 0 0 5 へ超展開！時空を超えた伏線（前書き）

ごめんなさい。

どうも、クレセントです。

謝罪文に関しては、上の「工事中」を見てください。

さて、改訂の原因となったのは改訂前の精霊界でのデュエル。

ライフ計算を間違えたせいで蓮が負けてしまったのに、そのままアドリブ精神で突っ走ってしまったからです。

時間がないのでこの辺で。クレセントでした。

…あ、4話の後編から見た方がいいかも。

T D T R - J P P 0 0 5 へ超展開！時空を超えた伏線

前回のあらすじ。氷結界の里にある神社に遊びに来たら蓮が雪の上で仰向けに倒れてた。以上！

「蓮ー？生きてるー？」

とりあえず揺すってみる。生きてる…よね？

「…んあ？」

「あ、起きた」

蓮が立ちあがり、灰色の髪と着ている服についた雪を払う。

「…あれ、クレナ？」

「大丈夫？そこにうつ伏せになったりして…」

「ん？…ああ、文句はトリシューラに言って」

「…オツケー、よくわかんないけどわかったわ」

うん、頭の方は大丈夫みたいね。よかった。

「で、ここはどこ？」

「訂正。どこか頭打ったの？」

「だから文句はトリシューラに…って、そうじゃないよ!」
むう、冗談で言ったのに…。

「クレナ、純粹にここはどこ?見た感じ神社みたいだけど…」

「ああ、そういうことね。ここは氷結界の里。で、あれがその中心にある神社だよ」

私が蓮の奥を指差すと、蓮は振り返って奥の神社を見る。

「氷結界…。ってことは、ここは精霊界?」

「うん。正確には精霊界第3次元だよ」

「…第…3…?」

「あ、別に深く考えなくても大丈夫だよ」

…あ、いいこと思いついた!

「蓮、ちょっとついて来て!」

面白いものを見せてあげよう!

(. .)

決して降り止むことのない雪に包まれた村。そこに暮らす一族は氷

の守護神の力を借りることによる封印術を操ることができる。そのため彼らは他の種族等から「氷結界の一族」と呼ばれるようになり、それが転じてこの小さな村は「氷結界の里」と呼ばれていた。

「氷結界の一族」の最大の特徴は、彼らを守護する四柱の神である。

- 一柱は氷結の地龍・グングニール。
- 一柱は浄化の水龍・ブリューナク。
- 一柱は断罪の天龍・トリシユーラ。
- 一柱は氷雪の風虎・ドウローレン。

2年前、精霊界第3次元にて「第一次世界防衛戦争」が勃発した。

精霊界第2次元に生息していた種族「魔轟神」「ワーム」。侵略という面で利害の一致した2つの種族は、手始めに第3次元にある氷結界の里に対して奇襲を仕掛けた。

奇襲は成功。死傷者を出すことは出来なかったが、代わりに氷結界の里の中心である神社の制圧を確実なものとした。

この神社には氷結界の守護神が眠っている。ここを制圧すれば、侵略はより堅実なものとなる。彼らはそう判断した。

対し、氷結界の一族は神社の外部から迎撃する準備を整えていた。守護神の眠る神社を制圧されてしまったら、我々に勝ち目はない。

最悪、守護神を奴らに悪用されてしまう。そうなる前に、何としても奴らを撃退しなければ。

一族が迎撃の準備を整え、いざ突撃しようとするところに、《氷結界の風水師》から緊急の事態を知らされた。曰く、

神社の中に、まだ里の民が残っている。

御鏡^{みかがみ}ミツキ。彼女は精霊界唯一の「人間」だった。

少女には特別な力があつた。それは、氷結界の守護神と魂を通わせることができるというもの。

始まりは8歳の時。当時神社に祀られていた三柱の龍神をかたどつた氷像を見つめている時だった。

まだ幼い彼女の手に届かないところにあつたはずの3つの氷像が、一瞬で彼女の前に現れた。まるで少女がそれらを召喚したかのよう

に。
12歳のときには魔力において彼女の右に出るものはいなくなつていた。さらには、守護神の一柱である氷雪の風虎^{ドゥローレン}を呼び出すことができるようになった。当時、風虎ドゥローレンは、かつて氷結界の一族から受けた恩を返すため外敵から一族を護り続け、ミツキが生まれる前には天寿を果たしこの世を去つていた。ミツキが召喚したこと、守護神として蘇つたのだ。

何が起こつたのかと聞かれると、彼女は決まつてこう答えたという。
「あやつ、まだ未練があるとか恩を返し切つていないとか言つておつたぞ」

この事件を機に、《氷雪の風虎 ドゥローレン》は氷結界の新たな守護神となり、ミツキは巫女として四柱の守護神と共にこの氷結界の里を護る使命を与えられた。

その少女が、今なお神社の中に取り残されていた。

一族の中で唯一守護神との意思疎通ができる彼女が人質などに取られてしまつては、過言でもなく氷結界の一族は無力と化してしまう。軍師が作戦の決行を宣言する直前、先手を打つたのは侵略軍であつた。外部の偵察に行つていた《魔轟神獣ルビィラーダ》が、この神社の中には守護神だけでなくそれを制御する《氷結の伝承者》がいるという情報を仕入れたのだ。幸いにも相手は行動する準備が終わつていない。彼らにはこの機を逃す手などなかつた。

しかし、彼らは…いや、神社の外で今にも進軍を始めようとしていた一族さえも気づくことはなかつた。

神社本殿の中、その少女　　13歳の誕生日を迎えたばかりの巫女が、既に四柱の守護神を召喚し、かつ守護神が全て最高威力の攻撃に要する時間を既に終えていたことに。

ここから先は、言わなくても予想は着くだろう。侵略軍をドローレンの一撃によつて1分と経たずに殲滅した彼女は敵が通つてきた空間の歪みに気づく。その歪みに三龍の砲撃をぶつけたら歪みが消え、敵の増援もなかつたため事態はこれで収束した。

後に、この砲撃は第2次元を3日掛けて永久凍土にしたことが判明。「第一次世界防衛戦争」は、第2次元に生息する全生命の凍死によつてあつさりと終結した。余談だが、第3次元の被害は、せいぜい里の一部が全壊した程度だつた。復興には約20日を要したらしい。

さて、今その神社の本殿では1人の少女がライトノベルサイズの本

を読んでいた。水色の長髪に藍色の瞳。白と水色を基調とした和服を身に纏っている。和服にしては下の丈が短く、膝ほどもないのだが。

「…ふう」

本にしおりをはさみ、閉じる。本殿に彼女以外の姿がないせいか、部屋中に音が響き渡る。…表題には「遊戯王5D、s」と書かれていた。

「遊びに来たよー!!」

ふと、外から他の少女の声がかかる。

「クレナか！待っている、すぐに行く！」

声をかけた少女の名はクレナ＝ヴァーミリオン。この少女の親友の一人である。

水色の少女は本を置くと立ち上がり、本殿を後にした。

言い忘れていたが、彼女こそが件の少女、御鏡ミツキである。現在は15歳だ。

(・・)

「今日もいつもの暇つぶしか？」

「うん、そんなところ！」

…あ、どうも。蓮です。デュエル中に《氷結界の龍 トリシューラ》に飛ばされた人です。

「…クレナ、そっちの者は誰じゃ？」

「あ、この人は空見蓮君。ミツキと同じ人間だよ」

「…あ、初めまして。クレナの言ってた通り、空見蓮です」

「妾は御鏡ミツキじゃ。気軽にミツキと呼んでくれて構わぬぞ」

「わかった。よろしく、ミツキ！」

「うむ。よろしく頼むぞ、蓮！」

ミツキさんの服装は和服の膝付近から下を切ったような感じ。こんな寒い中、よくそんな服装できるよね…。

「で、お主はどうやってこの世界に来たのじゃ？」

「あ、そうそう！私もそれ聞きたかったんだ！」

「あれ、クレナは見てたんじゃないの？」

「蓮ってば、境内で雪に埋もれて倒れてたんだよ？びっくりしたん

だから

ああ、クレナは俺が倒れてるのを発見しただけってことね。

「いや、だからあれはトリシューラが」

「トリシューラじゃと？」

「うん」

「（あやつ、後で召喚場所を熱湯風呂にして落としてくれるわ…！）
」

あ、この人って巫女さんだっけ。氷結界シンクロが全部式神って…。

「なんか、『力が欲しいか』とか『竜騎の伝承者』とか『汝が求めるべき力は一つだ』とか…。全く、どこの厨二病だよ本当に」

「『《竜騎の伝承者》！？』」

「…え？」

…あるえー？

「蓮、確かにトリシューラはそう言ったのじゃな！？」

「ちゃんと《竜騎の伝承者》って言われたんだよね！？聞き間違いなんかじゃないんだよね！？」

急に2人に詰め寄られ、俺は少し気圧された。

そういうと、ミツキは真面目な顔になって話を始めた。

「お主は、《無限ループ》を知っておるか？」

「《無限ループ》？メビウスの輪とか？」

「そうじゃ。そして、その《無限ループ》の中でも桁違いに規模が大きいのが」

「時間の巻き戻し…？」

「うむ、SFとかではよくあるアレじゃ」

つまり、スタンドアクション漫画で出てくる某レイエムとかのことです。

「時間を巻き戻す能力を持つものがその力を使えば、戻したところから新たな可能性を進むことができる。これはなぜだかわかるか？」

「《この世界に運命は存在しない》…からかな。」

「その通りじゃ。故に、時間を戻した張本人が戻す前と同じ行動をしても同じ結末を迎えることはないのじゃ」

「…あれ？でもさ、もしそれが2人いたら？」

「なかなか鋭いの。対立する者等がそれぞれその力を持っていたとすれば、互いに望まぬ結末を否定しあってしまうのじゃ」

「その結果《無限ループ》が成立するってわけね。で、それと《竜

騎の伝承者』に何の関係があるの？」

「《伝承者》というのは、いわば世界が《無限ループ》を無理やり終わらせるための存在なのじゃ。とは言えど、妾たち《伝承者》がどのような力を持つのかわからぬし、ましてや《無限ループ》の原因を作った輩など知るはずないのじゃがな」

…お、とりあえず厨二病的な何かに巻き込まれたっぽい。

「…あれ、ミツキも？」

「ん？ああ、言い忘れておった。妾は《氷結の伝承者》じゃ」

ここまで言い終えると、ミツキはさっきまでの砕けた体勢に戻った。

「さて、茶菓子でも用意するかの」

緊張感も解け、ミツキに連れられて俺は本殿に向か「失礼します」おうつて時に。

目の前に突如姿を現したのは、深緑の髪に白のカチューシャをつけた少女。左腕にはデュエルディスクを装着している。手に持っているのは…《ヴァイロン・プリズム》？

「…お主、この氷結界の里に何の用じゃ？」

ミツキが明らかな敵意を持っている。彼女は恐らく敵で間違いないのだろう。対し、相手は気にも留めずに自己紹介を始めた。

「初めまして。《結晶の伝承者》の桜井姫香さくらいひめかです」

「俺たちと同じ、《伝承者》…」

「はい。早速ですが、本題に入ります。《氷結の伝承者》の御鏡さん、および《竜騎の伝承者》の空見さん」

少女は一つ間を置き、そして。

デュエルディスクを構えた。

「2人とも、時間がないので早く私に捕獲されてください！」

t o b e c o n t i n u e d . . .

地面には一面の白いタイル。周囲には緑色の典型的な自殺防止用金網。さらに、私の後ろにあるのは鉄でできた扉。外側から鍵を閉め、金網の向こうを見遣る。見えたのはいつもと変わらぬ商店街の夜景。呉風学園の屋上にはただ1人。私、あまかわ天河音羽おとはだけだった。

「蓮君。今日は、蓮君に重大発表があるの」

もう一度言うが私1人だけ。別に幽霊がいるわけでも人外がいるわけでもない。

「私、今日でこの学園を卒業するんだ！」

言葉を紡ぐたびに、ひとりで涙があふれてくる。後悔はしない。はじめをつける…いや、つけられないからこそ私が決めたこと。

「それでね、卒業したら行きたいところがあるの！」

いや、本当の意味での卒業にはまだ一年以上もある。私はまだ高校2年生だ。

私は蓮君の味方であり続けたかった。しかし、それは叶わなかった。よりによって、私たち2人にとって最悪の形で。

ねえ、蓮君。聞こえてる？私ね、蓮君に会ったら伝えたいことがあるの。

「だから、行ってきます！」

私の行きたいところは

「今行くからね、弟くん…！」

弟くんがいる、冥界。

T D T R - J P 0 0 5 〈超展開！時空を超えた伏線〉（後書き）

雑談《遊戯王EXA 原作第1話冒頭》

ここは、とある中学校の校庭。そこには今、30人ほどの少年少女が2人一組で向かい合っている。そのなかで、緑色の髪を持つ少年「桜井遊人」^{さくらい ゆうじ}は、幼馴染である銀髪の少女「雪風理央」^{ゆまかせ りお}と向かい合っていた。

2人の左腕にはそれぞれ型の違うデュエルディスクがはめられている。少年のそれは、白をベースに水色のラインが入ったシンプルなデザイン。デュエルアカデミアの入試で合格したときに、アカデミアから支給されたものだ。対して、少女のデュエルディスクは授業用の汎用ディスク。ちなみに、遊人以外は全員これを付けている。

「…やっぱ俺、これ使わないとだめか？」

そう口にした遊人は、自分だけ違うデュエルディスクを使うことに不満を感じていた。

当然と言えば当然だろう。なぜなら、アカデミアに合格したのは彼ともう一人。ソリッドビジョンの吹雪と共に謎の失踪を遂げた少年【ドラグニティ】使いの「空見蓮」^{そらみれん}だけなのだ。ちなみに、彼のデュエルディスクは黄緑に黒のラインが入った遊人と色違いの物だ。

「仕方ないでしょ？そう先生に言われたんだから」

そして、それをなだめる理央。

…言い忘れていたが、今はデュエル学の授業中である。

2月8日。カリキュラムは全て終わっているため、本来なら授業な

ど無い。はずなのだが。

話がずれるが、ここでデュエルアカデミアの入試制度について少し話しておこう。

全国に3校存在するデュエルアカデミア。そこに入学できるのは各校毎年わずか100人のみ。全国で考えても300人なので、その入試試験は必然的にトップクラスの難度を誇る。故に、その実技試験の試験官も全国のプロデュエリストから毎年ランダムで選出される。…そう、ランダムで。

今年度のデュエルアカデミア入試試験、実技試験官に選出されたデュエリストは。

デュエルモンスターズ世界大会、ワールドチャンピオンシップ2011（WCS2011）世界第3位、武藤零次。

結果、全受験生4876人中、合格者は全国で4人。関東での合格者は桜井遊人と空見蓮の2人のみ。そのほかにもわずか2人しかないのだ。

アカデミア側も、この結果はさすがに予想していなかったらしい。そして2月7日、全国の中学校に緊急通知が送られた。

「2月28日、各会場でデュエルアカデミア入試試験を再度行う」話を戻そう。全国の中学校は、この通知を受け取るとすぐに三年生を招集。補習という名目で、デュエル学の実技授業が各地で行われるようになった。

「ま、別にいいか。やるうぜ、理央！」

「ええ。負けないわよ、遊人！」

そして、その1日目。遊人と理央のデュエルが、幕を開けた。

「デュエル!!」

T D T R ・ J P P 0 0 6 へ偶然と気まぐれの分かれ道 (前書き)

あとがきにアンケートがあります。アンケート結果自体は今後のストーリーに影響しません、少しだけお付き合いください。

「ここ、は…?」

目が覚めると、私は真っ白な空間の中にいた。辺りを見渡してみても、何も無い。

ここは一体どこなんだろう。確か私は、弟くんを追ってあの屋上から飛び降りたんだっけ。

「私…死ねたのかな…?」

ええ、その通りよ。

「!?!」

突然、私の頭の中に女の人の声が響く。びっくりした私は、条件反射的に辺りをもう一度見渡すが、やはりというべきか。

あ、ごめん。今ちょっと肉体出せないの。

「はい!?!」

…何をいっただうしたら”体が出せない”とか言う状況になるの?

だから、このままあなたの魂に直接語りかけるから我慢してね。

「あの、もしかして神様の類の方ですか？」

ええ、その通りよ。よくわかったわね。

「じゃあ、もしかして…転生とかの話ですか？」

そうよ。…って、なんでわかったのよ？

まさか、ウェブの転生者系ブログ小説を読んでいたことがこんなところで生きるなんて。

まあ、そういうことだから。で、どこか行きたい世界でもある？何かがある世界でもいいわよ？あ、でも生き返るってのは駄目だからね。

「ありがとうございます！それじゃあ…」

私の行きたいところはどこでもいい。強いて挙げれば遊戯王の世界なんだけど。

汝、天河音羽。我、《ルナリウヴェイルファイア極神聖帝オーディン》に何を望む？

いま私が望むのは、たった一つだけ。

「私を弟くんの…空見蓮のいる世界へ連れて行ってください！」

T D T R - J P O O 6

「2人とも、時間がないので早く私に捕獲されてください！」

……、……。

「「はあ？」「

…あ、どうも。蓮です。

「ですから、兄さんが返ってくる前にあなたたちを捕まえないといけないんです！」

ですからじゃなくて、そこに至る経緯が良く分からないんだけど…。
…ん？兄さんって…。

「もしかして、桜井遊人の妹さん？」

「あ、はい。兄さんを知ってるんですか？」

「うん、1度デュエルしたからね。途中で中断になっちゃったけど、トリシューラのせいだね。」

「あ、忘れてた！決闘境界、デュエリングポーター起動します！」

バチッ

うん？

「なにこれ？」

相手の足元から、ミツキの足元に向けて一直線に光の線が引かれていた。

「さあ、私とデュエルしてください！」

なんとなく、《闇のゲーム》に近い何かを感じ取った。…リアルデュエル力づくつて選択肢は無いのか、この世界は。

「蓮、お主呼ばれておるぞ」

「ミツキ、そっちからだって」

「何を言っておるか。どう考えてもお主からじゃろ?」

「いや、足元見ればわかるでしょ」

「……いや、これは関係ないじゃろ?」

「ミツキ、相手も急いでるから早く終わらせちゃえばいいじゃん」

「だったら妾ではなく蓮がやればいいじゃろ?」

「早くしてください!兄さんに晩御飯を作らないといけないんです
」!

「…蓮、はやおまえだよ!あなたです!」

ミツキの諦めが悪かったので中略。

DUEL START

「デュエル!」

先攻は姫香さん。《結晶の伝承者》って言ってたけど、何のデッキ
だろっ…?

1st: Himeka Sakurai LP: 4000
2nd: Mitsuki Mikagami LP: 4000

Turn: 1 Player: Himeka
Himeka LP: 4000 HAND: 5 6
Mitsuki LP: 4000 HAND: 5

「私の先攻です！ドロー！」

(. .)

「あなたが、《竜騎の伝承者》様…？」

丁度デュエルが始まったタイミングで、俺の背後から声が聞こえた。

「…どちら様ですか。あと空気読んでください」

デュエルの描写ができなくなるじゃないですか。

「…あの、こちらの方を見ていただけるとありがたいんですけど…」

「…えー」

仕方ない。後でミツキに解説してもらおう。

(. . .)

「何じゃと!?!」

「ひあつ!?!? な、なんですかいきなり!」

「あ、すまぬ! なんでもない!」

「もう、驚かさないでください!」

(. . .)

ミツキ、ごめんね!。

一応今の状況を言うと、姫香さんが《未来融合・フューチャー・フュージョン》で《ジェムナイト・クリスタ》と《ヴォルカニック・バレット》を落としたところ。この後は多分《ヴォルカニック・バレット》の効果を…あ、使った。

「…で、どちら様?」

俺は後ろにいると思われる女性に問いかける。あくまでデュエルは見たままで。

「私は《ドラグニティアームス竜騎の秘鍵》第三の騎士、アイシア^{II}キャルバニア。…もう一度聞きますが、あなたが《竜騎の伝承者》ですか?」

「あー、トリシューラが言ってたから多分そうなんだと思うよ?」

姫香さんが融合を発動し、フィールドに《ジエムナイト・マデユラ》が現れた。あ、またバレット。

「生返事で答えなくてだ…」

急に背後からの声が止まる。それと入れ替わるように
殺気。
びっくりして、つい俺は振り返ってしまった。

ドラグニティアームズにふさわしく、その殺気は生半可な者には真似できないほどに強い。だが、その殺気は俺に対して向けられたものではない。覇気は…はるか大空へと。炎の翼をもつ少女に向けられていた。

騎士の鎧と王女のドレスを足して2で割ったような服を身に着けた少女・アイシア。キャルバニアはこう告げた。

「武器を取ってください、伝承者様。侵入者です。《結晶の伝承者》の援軍という形と考えて間違いないでしょう」

少女は手元に金色を纏う。光は一条の煌めきを描いて、彼女の手に握られる。

気づけば、俺の手元にはいつもの短剣が握られていた。その柄は黒く、その刃は真紅に染まっている。…血の赤ではない。その金属自体が紅いのだ。

「手伝いに来たよ、姫香ちゃん！」

「な…援軍じゃと…!?」

相変わらず、どこから出てくるのかはわかっていない。だが、わかっていることが少しばかりある。

「あ、危ない　　！」

「お引き取り願います！虹色の剣閃

エクス・カリバー

　　！！」

一つ　　この短剣が傷つくことは決してないということ。

「…ふう、危ないなー」

「い、今のを避けた…!?!」

二つ　　真紅の刃が仄かに熱を帯びているということ。

「よ、よかった…」

「それじゃ、反撃させてもらおうよ…!」

「伝承者様、下がってください！」

「しまった…！蓮、逃げ　　！」

クラウド・ストライク
「焼き払え、陽光の神剣！！」

三つ　　これを持っている限り。

ブツン。

俺の意識が飛ぶ。

レヴァインテイル
「緋色に響く疾風の刃、薙ぎ払え」
Action

S i d e R e n
? t ? ? a
A ? ? ? ? ?
W ?

クラウド・ストライク
「焼き払え、陽光の神剣！！」

右手に太陽の光を集め、地上にいる姫騎士さんに反撃する。

「レヴァインテイル 緋色に響く疾風の刃、Action 薙ぎ払え！」

向こう側からも刃が、さっきの黄色いのは違う赤い刃が私の放った白い刃と交錯した。

白と赤の一閃が交差し、生じた爆風と雪原からの水蒸気が彼らの視界を覆う。煙が晴れる前に、急いで私は地面に降り立ち、

「デュアライズ 精霊共鳴解除…つと。」

デュアライズ 精霊共鳴を解除。すると同時に、私の背中にあった炎の翼が霧散した。

「それじゃ、デュエリクボウダー 決闘境界起動」

私の足元から彼の足元に赤いラインが伸びていく。

このラインは繋いだ相手とのデュエルを強制するもの。私たち《伝承者》にしか使えない特別な能力なんだって。デュエルが終わるまでは絶対に外せないけど、かわりにデュエルが終わるまでは絶対に邪魔されなくなる。悪く言えば《闇のデュエル》なんだけど、体への負担は私たち側で調節できるのが一番の違い。だから、姫香ちゃんも私も今回は負担率5%に設定してる（これが最小設定）。

「Action 薙ぎ払え」

煙が一瞬で払われる。…どうやらさっきのあれ、あの短剣で出してみたみたい。

バチッ

「あ」

なんとか間に合った。気づかれる前になんとかラインを繋ぐことに成功した。これ以上の戦闘は無意味と判断してくれたのか、彼の手にあった短剣が霧散した。

「…はあ。君も《伝承者》とか言う分類？」

「うん、私は《星導の伝承者》。あなたが《竜騎の伝承者》なんだよね？」

「（さっきと同じこと聞かれた…）まあ、一応ね。実感湧いてないけど」

…いつの間に、さっきの姫騎士さんがいなくなっていた。もしかしたらカードの精霊だったのかもしれない。

「で、始めるんだよね？」

「あ、うん…」

「」「デュエル…」

DUEL START

「俺の「先攻はもら」ドロー！」ええええええ!？」

1st:Ren Sorami LP:8000
2nd:??t??a A?????W? LP:8000

うー、先攻持つて行かれた…。

Turn:1 Player:Ren
Ren LP:8000 HAND:5 6
?t??a LP:8000 HAND:5

「…よし、《未来融合・フューチャー・フュージョン》を発動。《F・G・D》を選択し、《ドラグニティ・ファランクス》《ドラグニティ・アキュリス》《ドラグニティアームズ・レヴァティン》《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》《真紅眼の飛竜》の5体を落とすよ」

…え？

「さらに、手札から《ドラグニティ・ドウクス》を召喚」

ドラグニティ・ドウクス 4 ATK:1500 1700

ちよ、ちよつと!?

「《ドラグニティ・ドウクス》の効果発動。このカードが召喚に成功したとき、墓地からレベル2以下のドラゴン族ドラグニティ《ドラグニティ・ファランクス》を装備。さらに《ドラグニティ・ファランクス》の効果発動。装備されているこのカードを特殊召喚する」

ドラグニティ・ファランクス 2T DEF:1100

まさか、【ドラグニティ】!?

「レベル4・ドウクスにレベル2・ファランクスをチューニング」

我^{われ}紡^{つむ}ぎしは竜^{りゅう}の槍^{やり}、全^{すべ}てを貫^{つらぬ}く神^{しん}竜^{りゅう}の槍^{やり}。
刹那^{せつな}に響^{ひび}く雷^{らい}鳴^{めい}よ、吹^ふき荒^あれる風^{かぜ}と共^{とも}に在^あれ。

4 + 2 = 6

シンクロ召喚^{しんくろしょうかん}。解^とき放^{はな}て、金^{こん}色^{じき}の神^{しん}雷^{らい}。

「《ドラグニティナイト・ヴァジュランダ》、降臨」

ドラグニティナイト・ヴァジュランダ 6 ATK:1900

ああ、厄介なの相手にしちゃったな…。

「《ドラグニティナイト・ヴァジュランダ》の効果を発動。墓地に存在するドラゴン族・レベル3以下のドラグニティを装備する。もう一度フアランクスを装備。もう一度フアランクスの効果で特殊召喚」

【ドラグニティ】 前の世界では大会でそこそこ強かった部類。

事故率が高いから成績こそ残していないものの、対策を怠ると確実に痛い目を見るデッキ。まあ、殆ど現環境メタのとばっちりを受けているから案外どうにかなったりするけどね。
故に、サイドデッキが使えないシングルデュエルやマッチ1戦目とかは本当にきつい。

ドラグニティ・フアランクス 2T DEF:1100

そして、【ドラグニティ】を相手にするときには大体目にする光景が、まさに今この目の前に広がるうとしていた。

「レベル6・ヴァジュランダにレベル2・フアランクスをチューニング」

竜騎の絆がまた一つ、新たな奇跡を紡ぎだす。
夜空に瞬く綺羅星よ、その輝きで、我らを導け。

シンクロ召喚^{しんじゆかん}。解き放て^{とほな}、流星の神光^{りゅうせいのかんこう}。

「《スターダスト・ドラゴン》、降臨^{こうりん}」

スターダスト・ドラゴン 8 ATK:2500

はい、初手スターダスト。相手にすると、これが地味に厳しいのだ。

《竜騎の伝承者》を護るかのように舞い降りる《スターダスト・ドラゴン》。

「綺麗……」

正直、言葉が見つからない。星の輝きを纏ったその姿に、私は感動のあまり言葉を失った。

「カードを1枚セットしてターンエンド」

彼の声でふと我に返る。そうだ、とりあえず今はこのデュエルに集中しよう！

「私のターン、ドロー！」

《星導の伝承者》^{あまかわ} 天河音羽^{おとほ}として！！

t u r n . i E n d P h a s e

1st:Ren Sorami

• LP:4000 HAND:6 3

• 《スターダスト・ドラゴン》 ATK:2500

• 《未来融合・フューチャー・フュージョン》 Continuous

《F・G・D》 Turn:0

• set card:Mo-0, Ma-1

2nd:Otoha Amakawa

• LP:4000 HAND:5 5

• set card:Mo-0, Ma-0

t o b e c o n t i n u e d . . .

《未来融合みらいゆうがわい・フューチャー・フュージョン》

永續魔法（制限カード）

自分のエクストラデッキに存在する融合モンスター1体をお互いに確認し、決められた融合素材モンスターを自分のデッキから墓地へ送る。

発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時に、確認した融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

《ジェムナイト・マディラ》

融合・効果モンスター

星7 / 地属性 / 炎族 / 攻2200 / 守1950

「ジェムナイト」と名のついたモンスター + 炎族モンスター

このカードは融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。

このカードが戦闘を行う場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罫・効果モンスターの効果を発動する事はできない。

《ジェムナイト・クリスタ》

モンスター？

(テキスト未確認)

《ヴォルカニック・バレット》

効果モンスター

星1 / 炎属性 / 炎族 / 攻 1000 / 守 0

このカードが墓地に存在する場合、自分のメインフェイズ時に500ライフポイントを払う事で、自分のデッキから「ヴォルカニック・バレット」1体を手札に加える。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

ファイブ・ゴッド・ドラゴン

《F・G・D》

融合・効果モンスター

星12 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻5000 / 守5000

ドラゴン族モンスター × 5

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードは闇・地・水・炎・風属性モンスターとの戦闘では破壊されない。

《ドラグニティアームズ - レヴアティン》

モンスター？

(テキスト未確認)

《真紅眼の飛竜》

モンスター？

(テキスト未確認)

T D T R ・ J P P 0 0 6 〈偶然と気まぐれに分かれ道〉（後書き）

蓮と音羽の髪の色は元の世界にいたときと違います。蓮の髪は灰色、音羽のは濃い赤。お互いに相手の正体に気づいていないのはそれが理由です。

というわけで、あとがきです。

《氷結》VS《結晶》と《竜騎》VS《星導》の同時進行です。というわけでアンケート。

Q:どんな順番で見たい？

1. 《氷結》VS《結晶》から（《氷結》VS《結晶》 《竜騎》VS《星導》）
2. 《竜騎》VS《星導》から（《竜騎》VS《星導》 《氷結》VS《結晶》）
3. 2と同じ（《竜騎》VS《星導》 《氷結》VS《結晶》 《竜騎》VS《星導》）

アンケートは感想欄で受け付けます。それに伴い、アンケート終了まではユーザー以外の方の感想も受け付けます。皆さんの苦情と1票、お待ちしております。

ちなみに1票も来なければ、勝手に3番になります（ぶっちゃけこの可能性が一番高い気がする）。

もうひとつ。

今年度受験生（現中3・高3）の皆さんで集まって打ち上げコラボをやりたいと思っています。その名も、

《とある戦後の平行交差》

いや、新参者がこんなこと企画するなんておかしいですよ。傲慢ですよ。わかってます。でもこれはやりたいんです。今季受験生の人が多いみたいなので。

企画内容については後ほど活動報告に載せますので、それを見ていただけるとありがたいです。

あ、そういえば最近皆さんの活動報告見てないな…。

というわけで、今回はこの辺で。クレセントでした。

注。

この話は言羽・D・カラストロファイヤーさんの作品《遊戯王GX&amp;mp;5D's 百合キング、綾風理奈が吹かせる王者の鼓動。》とのコラボレーション作品です。詳しくは11/17更新の第69話をご覧ください。

この作品の時間軸はだいたいT D T R - J P 0 1 4 ぐらい、アカデミア再試験の話です。

このまま読んでも支障はない…と、信じたいです。あつたらごめんなさい。

…言羽さん、無断で某闇Jお借りしてすみません。あとがきも使うので、ここで謝らせていただきます。

あ、アンケートは継続中ですよ。

- 1、《氷結》VS《結晶》を先に見るか。
- 2、《竜騎》VS《星導》を先に見るか。
- 3、《竜騎》VS《星導》の途中に《氷結》VS《結晶》を挟むか。

一番見たいものを一人一票、感想欄にお願いします。出来れば感想…もとい、苦情も付けていただけるとありがたいです。
ちなみに今、2に1票が入ってるだけです。UZさん、貴重な1票をありがとうございます。

それでは、追撃の百合キーン69・5話、お楽しみくださいませー。

永い、夢を見た。

「一気に勝負を付ける！《シューティング・クエーサー・ドラゴン
《で》
《を攻撃！天地創造撃！ザクリエー
シオンバースト！」

「よせ！止める蟹！？嫌な予感しかしてこない！！」

この夢を、私はいつたい何回見続けたらだろうか？

『^{おや}か
くんー！』

「（ああ。わかってるよ、……！）ふっ……かかったな！《
《のモンスター効果発動！》

私は《
《と共に、何回戦い続けた
のだろうか？

「このモンスターが攻撃された時、オーバーレイユニットを2つ取り除く事で相手のモンスターを全て墓地に送る！そして、墓地に送られたドラゴン族モンスター全ての元々の攻撃力分のダメージを与えるー！」

私は、…と共に、何回戦い続けたのだろうか？

「放て、私の愛した…よ…!」

『うん!』

「『エターナル・リデンプション救済と断罪の光条!』」

そう、いつもここで私の夢は終わっている。

「あやせりな、後は貴様だ。私の全てを賭け…貴様と天下を賭けた一戦を挑む!」

私が口にする…という名前…。なぜここだけ聞こえないんだ？

「私は…私と…との約束、誓いを守る為に…貴様の霸道、越えてみせる!」

「よかるう、みま邪魔物はもはやいない。…我が霸道、誰にも邪魔はさせん!来い、さやかよ!この俺を越えられるならな!」

私は…誰のために戦っているんだ？

PRCS - J P 0 0 1

2月28日。デュエルアカデミア再試験当日。水色の髪の少年と赤い長髪の少女が試験会場に向けて走っていた。

少年の名は浮橋彩火。

少女の名は安藤朱里。

当初、彼らは電車に乗って試験会場には30分のゆとりを持って到着するはずだった。

「あーもう、なんでこういう日に限って電車が事故るのよ！」

「しらんがな！てかやばいって！もう9時になる！」

…お分かりいただけただけであろうか？

彼らの待ち合わせしていた駅の一つ前で人身事故が発生し、彼ら2人は走らざるを得なくなってしまったのである。

そして、現在時刻 8時57分。試験開始まで…。

「てか、間に合うのかこれ!?!」

「うっさい！いいから全力疾走よ！」

…いや、試験開始から57分経過。

(・・)

全力疾走でなんとか試験会場にたどり着いた。そのままの勢いで私と朱里は会場の扉を開け

ドゴオっ！

「ふっ！？」

「ちょ、彩火！？」

馬鹿な…開いてないだと…！？

「あ、それ引かないと開かないよ」

「「あ、ありがとうございます」」

ドアの近くにいた灰色の髪の人が扉を開けた。

「はい、ラスト2名無事到着しましたー！」

(。。。)！？

「…ま、間に合った…のか？」

「…そう、みたい…ね」

時計なんて見てる暇なかったから、正直言って今何時かわからなかったが。

ざわ… ざわ…

ざわ… ざわ…

観客の奴らの視線が私たちに集中する。

「おー、間に合ったか！」

「一応予定時間ぎりぎりですね」

「…で、誰がやりますか？」

デュエルフィールド(…で、あってるのか?)から3人の声がした。多分、彼らが試験官なんだろう。

「はい、それじゃあこっち来て」

灰色の人に誘導され、私と朱里はデュエルフィールドの中に入る。

「空見君、始めますよ」

紺色の髪的女性に、

「…何を？」

灰色の髪男性に、

「いや、試験をだけどね」

黒い髪男性に、

「蓮…まさかお前、素で言ったのか？」

濃い緑色の髪男性。

なるほど、この4人が試験官か？

「（…ちよつと、彩火）」

朱里からアイコンタクトがかかった。

私と朱里が幼馴染であるという利点は正直言ってこのアイコンタクトしかない。

…前にそれを言ったら「お前らもう結婚しろ」とか言われたからぶん殴つていたが。

「（…なに、朱里？）」

「（まずいわよ。試験官がこの4人なんて）」

「（…え？）」

朱里にそう言われ、4人の試験官を確認す…

ッ！？

「（。。。）」

「（…でしょ？）」

「（…ああ、朱里の言うとおりだ）」

まずい。まさか、試験官がよりによって例の《王を超えた4人》ジ・エクシードフォーだったとは…！

…ここで《王を超えた4人》ジ・エクシードフォーについて注釈をしておこう。

2月5日からの3日間、3か所で行われたアカデミア入試試験。その今年度の試験官は、なんとWCS世界第3位（当然日本では1位）の武藤零次だった。

彼はWCSの後の取材の時に《デュエルキング》の称号を捨てると宣言し、プロデュエリストを引退していた。

その人が、まさかこの入試試験の試験官をするなんて誰も思っ
てなかったわけでした。

元とはいえど、初代デュエルキングの實力は本物に決まっているわけ。結果、王に勝利してアカデミアへの切符を掴んだのは、東北で1人、関東で2人、近畿で1人という結果に。そのおかげで、今日2月28日の再試験が決まったんだけど…さ。

…要するに《王を超えた4人》とは、「本人試でデュエルキングに勝利した4人」のこと。

お分かりいただけただけであろうか？

つまり、試験官は…《王を超えた4人》のうちの誰か、ということである。

《古を紐解く氷結姫》織姫ゆみな。

【墓守】を扱う紺色のウェーブがかかった長髪の少女。切り札は《ブリザード・プリンセス》。

どうやら《王家の眠る谷・ネクロバレー》が厄介すぎるらしい。それを阻止すればいいのか？

《天を統べる竜騎士》空見蓮。

【ドラグニティ】を操る灰色の。切り札は《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》。

《竜の渓谷》の効果は実際見ていてやばいと感じた。いかにこれを破壊するかが重要になるだろうな。

《途絶えぬ四十の牙》宮沢拓斗。

デッキ40枚全てがモンスターという【シルミル】を使う黒髪。切り札は《ダーク・シムルグ》。

…いや、どうやって対策すればいいんだよ。《スキルドレイン》か

？やめてくれ、自滅するのが目に見える。

《英雄を束ねし勇者》桜井遊人。

【E・HERO】使いの濃緑色の髪少年。切り札は《E・HERO ジ・アース》

見た感じだと、要注意カードは《超融合》。噂では相手モンスターも素材にできるとか…。頼む、ただの噂であってくれ。

「（…私たちに死ねと言ってるのか？）」

「（…こんなの絶対おかしいわよ）」

「おい、2人とモ―？」

「は、はい！」

突然声がかかってびっくりしてしまった。どうやら試験が始まるらしい。

「とりあえず、厳正なジャンケンの結果でデュエル相手が決まったから。すぐに始めるよ」

…空見さん、ジャンケンは厳正と言えるんですか？なんか後ろで約2名 orz になってるんですけど。

「浮橋彩火は俺、空見蓮と。安藤朱里はゆみなとデュエルしてもらうから」

「あ、はい。わかりました」

私の相手は【ドラグニティ】か…。

「あ、ルールを説明しておきますね」

ゆみ…織姫さんが口を開いた。

「ルールは基本的に普通のデュエルと同じです。ただ、ライフはあなたが8000、私たちが4000の変則デュエルです。ハンデとして、先攻は私たち試験官がもらいますけどね」

なるほど、多少救いはあるみたいだ。

「（てか、こんな破格の条件で試験が成り立ってるってどういっしょ）とだよ…?）」

「（それだけこの4人が規格外ってことですよ。ま、とりあえず勝つわよ、彩火!）」

「（おいやめろ!死亡フラグ立てるな!）」

「（あ、ごめん!!）」

…はあ。

それじゃ、始めるとしますか。

「これより、試験番号175番・浮橋彩火と、」

「176番・安藤朱里の実技試験を始めます!」

「はい！よろしくお願いします！」

「デュエル！」

t o b e c o n t i n u e d . . .

「我が覇道を貫く為に！せめて、美しく散らせて見せよう！行け！
！《ビッグバン・ノヴァ・ドラゴン》で《竜滅神機ケンベルフィン
》を攻撃！！」

『ごめんね、爽嘉くん。私…』

「クリムゾン・アブソリュート・パワーフォース！！」

『あなたの力に、なれなかったよ…！！』

「リバーズ、罨…発動…」

『…え？』

「何！？リバーズ罨だと！？」

『…うそ…やめて…！そのカードは、使っちゃダメ…！！』

「《アストラルバリア》！！」

「なんだと！？ま、まさか…！！」

「攻撃対象を、私に変更する…！！」

『…そんな…、…どう…して…！！』

「…《竜滅神機ケンベルフィン》…いや、円香。君が、傷つくのだ

けは…見たくは無いから…ち…」

『いや…やめ…』

「うわあああああ！！」

『いやあああああ！！！』

爽嘉くん。

生まれ変わった世界で、あなたは元気にしていますか？

多分、今の彩火くんは…私のこと、覚えてないんだよね。

…私は、大丈夫だよ。さやかくんが、幸せなら。

今の世界で、さやかくんは自分の幸せを見つけて。

私はそれを、見守ってあげるから。

…嘘だよ。

すく、さみしいよ。

会えないなんて、やだよ。

もう二度と、さやかさんとデートできないんだよ？

もう二度と、さやかさんとデュエルできないんだよ？

もう二度と、さやかさんの精霊として戦えないんだよ？

もう二度と、さやかさんに「大好きっ！」って、言えないんだよ…？

139

お願い…。

お願いだから…思い出してよ…！

「…さみしいよ、さやかくん………！…！」

T D T R ・ J P P 0 0 7 〈そろそろ原作ファンに怒られるかも〉（前書き）

アンケート結果。

1…0票。

2…2票。

あれからもう1票入りました。葦切さん、ありがとうございました。

3…0票。

というわけで、2になりました。

いや、正直に言うと、2票も貰えてうれしいです。反面、まだ実力不足なんだということを感じさせられましたね。

感想への返信、も少しだけお待ちください。

そろそろこの世界の世界観が明らかになってくる…のか？第8話です。

さて、センター試験の勉強に戻るか…

T D T R ・ J P P 0 0 7 《そろそろ原作ファンに怒られるかも》

《精霊界 - 第0次元》。

そこに住まうのは、精霊の中でも高位の存在。

特に、生きとし生けるものの住まう世界を定義した《代行者》や絶対的正義の象徴とされる《ライトロード》を始めとした、別次元において神格化された存在が住まう世界。

自由の象徴とされ、隷属の枷を断つ存在とされる《ドラグニティ》もまた、この《第0次元》の存在だった。

そわはさておき
閑話休題。

《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》の少女、クレナ・ヴ
アーミリオンが《竜の渓谷》に降り立つ。

「…嘘…でしょ…!？」

翼をしまうことも忘れ、少女が発することのできたのはこの一言だけだった。

煌めく龍鱗に覆われた、真紅の龍。

かつては自由を何よりも愛した少年に仕え、その天雷をもって神々を滅ぼした伝説の一片。

…もし蓮がこの場所にいたら、龍の名をこう呼んだらう。

《オシリスの天空竜》と。

緋燈色金の龍

ひひいろかね

レヴァイン。

かつて神々に反逆し、この地で永久の眠りについた《幻神》の一柱。この龍こそ、ドラゴン族の原初の一であり、《ドラグニティ》の守護神龍である。

その龍が、この地で目覚めていたのだ。

「クレナ！」

彼女の存在に気付いたのか、一人の少女が駆けってくる。金髪のロングヘアを後ろで結んだ少女、ユグドラ・ミリスティ。《ドラグニティームズ・ミスティル》の精霊である。

「ユグドラ！どうしたの、これ！？なんでレヴァインが目覚めてるの！？？」

「知らないわよ！今のところはスルトが立ち会ってるけど…」

「もしかしてそれ、《竜騎の伝承者》と関係ある？」

「え！？なんでクレナがそれを…」

「…やっぱり」

ユグドラの驚愕を見て、クレナの中にある一つの仮説が事実に変

質する。

「私、《竜騎の伝承者》のことを伝えに来たの！今すぐ私と来て、ユグドラー！」

T D T R - J P P 0 0 7

t u r n . 1 E n d P h a s e

1 s t : R e n S o r a m i

・ L P : 8 0 0 0 H A N D : 6 3

・ 《スターダスト・ドラゴン》 A T K : 2 5 0 0

・ 《未来融合 - フューチャー・フュージョン》 C o n t i n u o u s

《 F ・ G ・ D 》 T u r n : 0

・ s e t c a r d : M o - 0 , M a - 1

2 n d : O t o h a A m a k a w a

・ L P : 8 0 0 0 H A N D : 5 5

・ s e t c a r d : M o - 0 , M a - 0

T u r n . 2 P l a y e r : O t o h a

? e ? L P : 8 0 0 0 H A N D : 3

「私のターン、ドロー！」

デッキから思いっきりカードをドローする…よし！

「魔法カード《天空の宝札》を発動！手札の天使族モンスター《大天使クリスティア》を除外し、デッキからカードを2枚ドロー！」

手札の《大天使クリスティア》を除外用のポケットにしまつて、デッキから2枚ドローする。デメリットが酷いけど【代行天使】だからあまり問題ない。

「《強欲で謙虚な壺》を発動！デッキの上から3枚をお互いに確認し、そのうち1枚を私の手札に加えるよ！」

発動したターンは特殊召喚が出来なくなっちゃうけど、それ相応の効果を用意している強力なカード。今回は《天空の宝札》とデメリットが被ってるから気にしない。

そういえば、前の世界では1枚4000円ぐらいしてたっけ。

フィールド上に3枚のカードが映される。そして、左から順番に表になっていく。

「1枚目…オープン！」

うん、まあ…いいんじゃないかな。

1枚目 《次元幽閉》

除外なら《スターダスト・ドラゴン》が処理できる。とりあえずは

他の2枚を見てから。

「それじゃ、2枚目！」

…あ。

2枚目

《強欲で謙虚な壺》

選択肢が減った。…まあ、これを使う以上は仕方ないよね。気を取り直して…。

「…3枚目！」

…来た！

3枚目

《星導》の象徴……【代行天使】のキーカード！

「私は《神秘の代行者 アース》を手札に加える！」

デッキから1枚のカードが取り出される。私がそれを手に取ると、デュエルディスクは勝手にデッキをシャッフルしだした。本当にこの機能って便利だね。

「そして、《神秘の代行者 アース》を召喚！」

私のフィールドに銀色の髪をした小さな天使が飛び出す。

神秘の代行者 アース 2T ATK:1000

「《神秘の代行者 アース》の効果発動！デッキからアース以外の「代行者」のモンスター、《創造の代行者 ヴィーナス》を手札に加えるよー！」

《竜騎》の使う【ドラグニティ】は対策さえすれば7割ぐらいはど
うにかなるデッキ。落ち着いていこう。

「カードを3枚セットしてターンエンド！」

t u r n . 2 E n d P h a s e

1 s t : R e n S o r a m i

・ L P : 8 0 0 0 H A N D : 3 3

・ 《スターダスト・ドラゴン》 A T K : 2 5 0 0

・ 《未来融合 - フューチャー・フュージョン》 C o n t i n u o u s

《 F ・ G ・ D 》 T u r n : 0

・ s e t c a r d : M o - 0 , M a - 1

2 n d : O t o h a A m a k a w a

・ L P : 8 0 0 0 H A N D : 6 3

・ 《神秘の代行者 アース》 A T K : 1 0 0 0

・ s e t c a r d : M o - 0 , M a - 3

T u r n . 3 P l a y e r : R e n

R e n L P : 8 0 0 0 H A N D : 3 4

? t ? ? a L P : 8 0 0 0 H A N D : 3 3

「俺のターン、ドロー」

さて、まさか《星導の伝承者》のデッキが【代行天使】だったとは。
【ドラグニティ】だと結構きついんだよね。

未来融合・フューチャー・フュージョン Turn:0 1

「《調和の宝札》を発動。手札の《ドラグニティ・アキュリス》を落として2枚ドロー」

… やつと来た。

「フィールド魔法《竜の渓谷》を発動」

風景が俺と《星導》を残して夕焼けの映える渓谷に一新される。

「《竜の渓谷》の効果発動。手札の《大嵐》を落として1つ目の効果。《ドラグニティ・レギオン》を手札に加える」

俺のセットしたカードは《盗賊の七つ道具》。相手のセットカードは3枚もあるけど、【代行天使】相手にためらっていい暇なんてない。

「で、そのまま《ドラグニティ・レギオン》を召喚」

俺の場に、ナツクルを装備した翼人が…

.....。

..... 現れないね。

「ライフを2000払って《神の警告》を発動したよ！《ドラグニ
ティ・レギオン》の召喚を無効にして破壊する！」

?t??a LP:8000-2000=6000

そういうことか。召喚無効はフィールドにモンスターさえ現れない
ってことか。こっちの原作より演出凝ってるね。

まあ、所詮はただのカウンター”^{トラップ}罠”なんだけと...さ。

「悪いけど、これは通させてもらうよ。チェーン発動、《盗賊の七
つ道具》！ライフを1000支は「私もチェーンするよ！《盗賊の
七つ道具》」！」「!?!?」

何...だと...?」

Ren LP:8000-1000=7000

?t??a LP:6000-1000=5000

「悪いけど、《ドラグニティ・レギオン》は通させないよ！」

「...すよね...」

俺のフィールドで表になった2枚のカードが音を立てて砕け散る。召喚権が無駄になってしまったが、相手のセットを3枚中2枚も消費させた。ライフアドバンテージもとれたし、そこそこいい流れな気がする。

「バトルフェイズ。《スターダスト・ドラゴン》で《神秘の代行者アース》を攻撃！」

バトルフェイズに入り、白銀の龍が星の光を纏って舞いあがる。

「スターライト・バースト降り注げ、星嵐の光条！」

そして、銀色の光が天使に向けて一直線に放たれへと消えた。次元の渦

…おk、まずい。

「トランプ発動！《次元幽閉》！」

次元の裂け目からなんか黒い手が伸びてくる。

え、ちよ、次元幽閉ってそんな演出なの！？怖っ！

…あ、詳しくは「ever sion」で検索してください。SAN値直葬ですよ。

「きゃあああああ！？」

…自分で使っというてなんであなたが怖がってんですかと、そんなことより。

「仕方ないか。手札から速攻魔法《サイクロン》を発動」

「え!?!」

「そして、それに《スターダスト・ドラゴン》の効果チェーン。
スターライト・リフレクション
導け、綺羅星の幻光!」

白銀の龍が量子化し、漆黒の手をかわす。虚空を切った黒い腕は、
もがきながら消滅した。

「なるほど、そういう避け方があったんだ…」

「カードを1枚セットしてターンエンド。エンドフェイズに《スターダスト・ドラゴン》は帰ってくるよ」

光の粒子が俺のフィールドに集まり、白銀の龍が再構成される。

turn.3 End Phase

1st: Ren Sorami

• LP:7000 HAND:40

• 《スターダスト・ドラゴン》ATK:2500

• 《竜の渓谷》field

• 《未来融合・フューチャー・フュージョン》CONTINUOUS

《F・G・D》Turn:1

• set card:Mo-0, Ma-1

2nd: O to h a A m a k a w a
• LP: 5000 HAND: 3 3
• 《神秘の代行者 アース》 ATK: 1000
• set card: M o - 0 , M a - 0

Turn . 4 Player : ? t ? ? a
Ren LP : 7000 HAND : 0
? t ? ? a LP : 5000 HAND : 3 4

「私のターン、ドロー！」

《星導の》がカードをドローする。

「私は《創造の代行者 ヴィーナス》を召喚！」

フィールドに姿を現したのは両目を閉じた金髪の女性。周囲には赤・青・紫の球体が浮かんでいる。

創造の代行者 ヴィーナス 3 ATK: 1600

「《創造の代行者 ヴィーナス》の効果！ライフを500払ってデッキから《神聖なる球体》を特殊召喚するよ！3回分まとめて発動！」

? t ? ? a LP : 5000 - 1500 = 3500

女性の周囲にあった3つの球体がフィールドに並ぶ。

神聖なる球体 2 ATK:500

「さらに《馬の骨の対価》を発動！私のフィールドの通常モンスター、《神聖なる球体》を墓地へ送って、デッキからカードを2枚ドロロー！」

球体のうち、紫色のが二つに分離し《星導の》のデュエルディスクの中に収まる。そして、彼女はデッキから2枚のカードをドロールした。

「…やばい、かな」

もし《星導の》が転生者でないなら、これから召喚されるのは《神聖騎士パーシアス》とか《ライトエンド・ドラゴン》とかだっただろう。

だが、もし彼女が転生者なら、出てくるのは…！

「さあ…行くよ！レベル3《創造の代行者 ヴィーナス》とレベル2《神聖なる球体》2体にレベル2《神秘の代行者 アース》をチェーンング！」

てんかがやみちび
天の輝きに導かれ、九つの星は紡ぎだす！
いせかいねむりゅう
凍てつく世界に眠りし龍よ、全てを滅する白銀となれ！

3 + 2 + 2 + 2 = 9

シンク口召喚！煌めけ、天征の吹雪！

「来て、《氷結界の龍 トリシューラ》!!!」

turn.4 Main Phase 1

1st:Ren Sorami

• LP:7000 HAND:0

• 《スターダスト・ドラゴン》 ATK:2500

• 《竜の渓谷》 field

• 《未来融合 - フューチャー・フュージョン》 Continuous

《F・G・D》 Turn:1

• set card:Mo-0, Ma-1

2nd:Otoha Amakawa

• LP:3500 HAND:4

• 《氷結界の龍 トリシューラ》 ATK:?

• set card:Mo-0, Ma-0

to be continued...

《天空の宝札》

通常魔法

手札から天使族・光属性モンスター1体をゲームから除外し、自分

のデッキからカードを2枚ドローする。

このカードを発動するターン、自分はモンスターを特殊召喚する事ができず、バトルフェイズを行う事もできない。

《強欲で謙虚な壺》

通常魔法

自分のデッキの上からカードを3枚めくり、その中から1枚を選択して手札に加え、残りのカードをデッキに戻す。

「強欲で謙虚な壺」は1ターンに1枚しか発動できず、このカードを発動するターン自分は特殊召喚する事ができない。

《神秘の代行者 アース》

チューナー（効果モンスター）

星2 / 光属性 / 天使族 / 攻1000 / 守 800

このカードが召喚に成功した時、自分のデッキから「神秘の代行者アース」以外の「代行者」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

フィールド上に「天空の聖域」が表側表示で存在する場合、代わりに「マスター・ヒュペリオン」1体を手札に加える事ができる。

《神の警告》

カウンター罫（準制限カード）

2000ライフポイントを払って発動する。

モンスターを特殊召喚する効果を含む効果モンスターの効果・魔法・罫カードの発動、モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚のどれか1つを無効にし破壊する。

《盗賊の七つ道具》

カウンター罠

1000ライフポイントを払って発動する。

罠カードの発動を無効にし破壊する。

《次元幽閉》

通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

その攻撃モンスター1体をゲームから除外する。

《創造の代行者 ヴィーナス》

効果モンスター

星3 / 光属性 / 天使族 / 攻1600 / 守 0

500ライフポイントを払って発動する。

自分の手札またはデッキから「神聖なる球体」1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

《神聖なる球体》

通常モンスター

星2 / 光属性 / 天使族 / 攻 500 / 守 500

聖なる輝きに包まれた天使の魂。

その美しい姿を見た者は、願い事がかなうと言われている。

《馬の骨の対価》

通常魔法

効果モンスター以外の自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を墓地へ送って発動する。
自分のデッキからカードを2枚ドロウする。

《氷結界の龍 トリシューラ》

シンクロモンスター？

星9/? 属性/? 族/攻/?/守?

(テキスト未確認)

…ああ、わかってるよ。

なぜここで切ったか…だろ？

私は、出来るだけ早く読者の方々に続きを読んで欲しかったんだ。だから、メモ帳が10kbになったのを見てすぐに投稿したよ。そのためにこんな切り方になってしまったんだ。

わかっているよ。すべては私の責任だ。

だが私は謝らな

蓮「レヴァインテイル緋色に響く疾風の刃、Action薙ぎ払え！」
音羽「クラウンリユート・ストライク焼き払え、陽光の神剣！！」

うわあうわあうわあうわあうわあうわあ…

クレセント「UBW風にやってみた」

リア友「ああん？最近だらしねえな？」

遅くなりました。どうも、クレセントです。

日本未発売カードに手を出しました。他に合うカードがなかったからね。仕方がないね。

それでは、第？話をお楽しみください。

歪みねえセンター試験まで1カ月切りました。そろそろまずい。

修正。まだ8話でした。

12/24

さらに修正。現実味のないテキストにやや現実味を持たせました。

T D T R ・ J P P 0 0 8 《魔王城からは、空が見られない》

《オシリスレヴァイン・ジーケンの天空竜》。あなた、いったい何のつもり？

「その声…《極神ルナ・ヴェイル聖帝オーディン》か」

なぜ《空見蓮をこの世界に転送した》の？

「違うな。彼の今の繋がりである《織姫ゆみな》もだ」

そうじゃない！今の《空見蓮》は《天河音羽》にとって…！

「そうだ。だから送ったんだ」

な…！？

「何度も言っているだろう。《下位の生命の転生、及び転送は神としての職権濫用》だ。それ故に、《神々に与えられるのはそれに値する程度の生命への救済》のみだ。《織姫ゆみな》は彼の支えとなってもらっ」

だからって、《空見蓮》を転送する理由にはならないわよ！

「目的ならある。《空見蓮に過去と決別させる最後の試練》だ。そのためにも《天河音羽》を使わせてもらう。まあ、本来なら《天河沙耶》、《池田達也》、《川澄星来》や《織姫かりな》のつもりだったんだが……」

… 《天河沙耶》達ならわかるわ。でも、《天河音羽》は違う！

「《極神聖帝オーディン》^{ルナ・ヴェイルフィア}。貴様は神としての経験が浅すぎる。これで少しは学ぶが良い」

奴からの通信が途絶えた。聞きたくない判断したのだろう。だから奴は甘いのだ。視点が狭すぎる故に、主観的な判断しかできていない。

「覚えておけ、《極神聖帝オーディン》^{ルナ・ヴェイルフィア}。現代のこの世界、救うべき《人間》は限りなく少ない」

奴に通信を繋ぎ返す。こうでもしなければ、奴は話を聞かないからな…。

覚えておけ、新参。生命を存在意義を冒した者に救いはない。そのような存在に貴様が如何に同情しようと、我らの下す裁キ^{ケツクロ}は変わ

らないということを。

「《天河音羽》に救いはない。貴様がいかなる手を使おうと、魂の繋がりを冒涇したものは救わせん！」

T D T R - J P 0 0 8

「さあ…行くよ！レベル3《創造の代行者 ヴィーナス》とレベル2《神聖なる球体》2体にレベル2《神秘の代行者 アース》をチユーニング！」

てん かがや みちび 九つの星は紡ぎだす！
天の輝きに導かれ、
凍てつく世界に眠りし龍よ、
全てを滅する白銀となれ！

3 + 2 + 2 + 2 = 9

しんくろ しょうかん きりめけ、 てんせい の ふうき
シンクろ召喚！煌めけ、
天征の吹雪！

「来て、《氷結界の龍 トリシューラ》！！」

turn.4 Main Phase 1

1st: Ren Sorami

・LP:7000 HAND:0

・《スターダスト・ドラゴン》ATK:2500

・《竜の渓谷》field

・《未来融合 - フューチャー・フュージョン》Continuous

《F・G・D》Turn:1

・set card:Mo-0, Ma-1

2nd: Otoha Amakawa

・LP:3500 HAND:4

・《氷結界の龍 トリシューラ》ATK:2700

・set card:Mo-0, Ma-0

大地に降り立つ、三つ首の守護神龍。ミツキが使役する式神の1体で、《断罪の天龍》と呼ばれている…らしい。

氷結界の龍 トリシューラ 9 ATK:2700

「トリシューラの効果発動！フィールド・墓地・デッキから1枚ずつゲームから除外する！フィールドから《未来融合 - フューチャー・フュージョン》を、墓地から《ドラグニティ - ファランクス》、手札には、無いね。2枚を除外して！凍結せよ、フローズン・ロスト歪みし因果！！」

左右の口が開き、冷凍光線が放たれる。右のはフィールドにあった

《未来融合・フューチャーフュージョン》のカードを貫き、粉々に砕いてしまった。左のは俺のデュエルディスクに当たり、墓地にあつた《ドラグニティ・フアランクス》のカードが排出された。

「手札から《天空の聖域》を発動！フィールドを塗り替えて《竜の溪谷》を破壊！」

全てを護る《スターダスト・ドラゴン》であっても、ルールによる破壊デュエルの理までは防ぐことは出来ない。

空が朱から蒼に一変し、戦場は竜騎の故郷から天使の神殿へと移り変わった。

「バトルフェイズ！《氷結界の龍 トリシューラ》で《スターダスト・ドラゴン》を攻撃！」

それぞれの口から水色の魔法陣が展開され、それらがすべて俺の場の《スターダスト・ドラゴン》に標準を合わせる。

トリフローズ・コキユートス
「全て亡き氷嵐の三連奏！！！」

…スターライト・ブレイカーってあるよね。まさにそれ。青いそれが3つ。

白銀の龍が、氷像となって砕け散る。あいにく、この伏せカードはトリシューラの効果を避けるためにセットした《通常魔法》なんで

「くっつ…！」

Ren LP:7000-2000=6800

精霊界だからだろうか、攻撃の余波がこっちにまで伝わってくる。

たった200の超過ダメージだというのに。

「カードを1枚セットして、ターンエンド!」

turn・4 End Phase

1st: Ren Sorami

・LP: 6800 HAND: 0

・set card: Mo-0, Ma-1

2nd: Otoha Amakawa

・LP: 3500 HAND: 2

・《氷結界の龍 トリシューラ》ATK: 2700

・set card: Mo-0, Ma-1

「やっぱり、転生者だったんだ」

「うん。よくわかったね」

ターンの継ぎ目、《星導の伝承者》と軽く言葉を交わす。

「そりゃあね。【代行天使】でトリシューなんて使うから」

「そういう君だって、【ドラグニティ】で《F・G・D》使ってるじゃない」

「まあ、俺は転生者じゃなくて転送者だね。生きたまま飛ばされてきたから」

「そうなんだ。あ、今のうちに自己紹介しておこうかな」

聞クナ。

え…？

ソ

ノ

名

ヲ

聞

ヒ

テ

ハ

ナ

S i d e
R e n
M i t s u k i

「私は天河音羽。今はちょっと訳ありで姫香ちゃんの家に住まわせてもらってるの。君の名前は・・・」

中

ナ

ラ

「《氷結界の籠 ブリユーナク》でダイレクトアタック！」

妾の指示で、浄化の水龍が空に舞う。

「これで最後じゃ…華蝶風雪！」かぢよふうとうはつ

そして、その身に纏った吹雪を《結晶の伝承者》に叩きつける。

「きゃあああああ！！！」

H i m e k a L P : 1 5 0 0 - 2 3 0 0 = 0

姫香のライフポイントが0になると同時に、妾の足元に繋がれていた線が消滅した。どうやら《決闘境界》デュエルング・ポーターの役目はこれだけのようじやな。

デュエルの強制、外部からの干渉拒否、そして決闘中に発生する衝撃の実体化。この三つが《決闘境界》の全て。

「やはり《ヴォルカニック・バレット》の使いすぎじゃ。いくら1回の消費が少ないと言えど、5回も使えば2500。残りが1500となれば、少し押されるだけで負けてしまうぞ」

「ああ、やっぱりそうですよね…。予想外に回ったからつい調子に乗っちゃって…」

よくもまあ、先攻1ターン目で《ヴォルカニック・バレット》の効果
果を5回も使えたものじゃ。そして《融合モンスター》3体に《リ
バースカード》1枚、さらには《手札コスト》まで用意するのじゃ

から…。

今思えば、これが。

「さて、蓮の方はどうなっておるかの」

これが、総ての始まりだった。

「・・・ティ・ファランクス」を落とし、2枚ドロ」

そこにいるのは、きっと蓮ではない。

「《手札抹殺》発動。お互いに手札を全て落とし、その枚数分ドロしなおす。俺は《BF・精鋭のゼピュロス》を落として1枚ドロ」

蓮ではない、何か別の存在だと。

「《朱光の宣告者》2枚か…終わったよ。俺の勝ちだ。《死者蘇生》発動。出番だ、クレナ」

別の何かだと、そう信じたかった。

『蓮…どうしたの…？目が、怖い…よ』

「《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》の効果発動。墓地の《ドラグニティアームズ・レヴァテイン》を特殊召喚」

それ故か、御鏡ミツキは目を離せなくなっていた。

『…そっか。相手は、アイツだったんだ』

「《ドラグニティアームズ・レヴァテイン》の効果、《ドラグニティアームズ》を装備し、自身の効果で特殊召喚」

この直前、《星導の伝承者》は大きな過ちを犯した。

「さらに《BF - 精鋭のゼピュロス》の効果を発動。《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》を手札に戻し、特殊召喚」

《竜騎の伝承者》に自らの名を言ってしまった。

「《ドラグニティアームズ・レヴァテイン》を除外し、《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》を特殊召喚」

『待て！俺の出番、まさかこれだけじゃな・・・』

『スルト、ごめんねー』

《魔王レン》を殺した、《勇者オトハ》の名を。

「《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》の効果。墓地の《スターダスト・ドラゴン》を特殊召喚」

『あと少しだけ、力を貸して！一来たれ、我の名において《コーリング》！』

天河音羽。その名は、蓮の心を壊した者の名。

「レベル4《BF - 精鋭のゼピュロス》にレベル2《ドラグニティ・ファランクス》をチューニング」

《天河蓮》に自殺をさせた少女の名だった。

竜騎の絆がまた一つ、新たな奇跡を紡ぎだす。
日出ずる国より昇りし竜よ、奇跡の風を、この地に描け。

少女の深い愛は、皮肉にも彼を殺してしまつう。

4 + 2 = 6

シンクロ召喚^{しんじゆかん}。解き放て^{とほな}、煌めく陽光^{きらめくようこう}。

故に、彼を追つて自殺をしたというのに。

「《オリエントドラゴン》、降臨^{きやうりん}」

確かに、当然と言えば当然だろう。

「《オリエントドラゴン》はシンクロ召喚に成功したとき、フィールドのシンクロモンスター1体を除外する。《氷結界の籠 トリシユーラ》を除外だ。終劇^{さんせつ}を告げる夕焼け^{ゆうやけ}」

自分を殺した者を許すことなど、出来るはずがない。

「バトルフェイズ、《オリエントドラゴン》でダイレクトアタック。
邁進^{まいしん}せよ、日輪の神風^{にりんのかんぷう}」

それでも彼女は、彼と共に生きていたかった。

「クレナ、ごめん。少しだけ、付き合って」

『…うん、わかってる!』

そう、これは空見蓮いまのしづなに与えられた最後の試練。

『音羽は、蓮を殺そうとした!だから、私もあいつを許さない!』

「…ありがとう、クレナ!」

天河カコとの決別、そして。

「姫香、《星導の》を元いた世界に戻るようしておいた方がよいぞ」

「ミツキさん…?」

「もしかしたら…蓮は、奴を殺すつもりかもしれん!」

そしてそれは、同時に彼女の死を定義する。

「《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》で、ダイレクターア

タック！」

私は星無き空に在る《I'm in the starless .
》

私の体は闇に染まり《My body is black me
tal .》

私の心は光に飲まれ《My soul is white fl
are .》

私の想いは既に亡く《My tears is bloody
rain .》

だから、私は混沌を《So i call the holy
dark .》

願いを殺す焰と成す《Your despair is my
pressure .》

蓮の住んでいた世界には、こんな言葉がある。

「デュエリングポーター、ドロアウト、ダメージレイト、フルオープン」
「決闘境界、二重起動、衝撃緩衝、制限解除」

『詠唱レベルX、完了！あなたは、灰一つ残さない！』

奇跡も魔法もあるんだよ。

「いよいよもってさようなら、姉さん。今度こそ、永遠に」

でも救いはないね。

「いや、だよ…、弟くん…！！」

「『終焉よ、白き劫火と成せ！聖なる闇、願い殺す焰！！』」
ホーリーダーク・エクサフレア

少女の周りに展開された魔法陣が、灰色の砲撃を放つ。

その焰は全て《星導の伝承者》に直撃し、少女の悲鳴さえも焼き払う。それが、今まで少年が背負わされた苦しみの全てだと言わんばかりに。

O t o h a L P : 1 2 0 0 - 2 8 0 0 = 0

決着はついた。それぞれの形で。

この時を以って、神によって整えられた運命は否定された。

t o b e c o n t i n u e d . . .

《氷結界の龍 ひょうけつかいりゅう ブリユーナク》

シンクロ・効果モンスター（制限カード）

星6 / 水属性 / 海竜族 / 攻2300 / 守1400

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

自分の手札を任意の枚数墓地に捨てて発動する。

その後、フィールド上に存在するカードを、墓地に送った枚数分だけ持ち主の手札に戻す。

《手札抹殺 てふだまっせつ》

通常魔法（制限カード）

お互いの手札を全て捨て、それぞれ自分のデッキから捨てた枚数分のカードをドローする。

《朱光の宣告者 バーミリオンドクレアラ》

チューナー（効果モンスター）

星2 / 光属性 / 天使族 / 攻 300 / 守 500

このカードと天使族モンスター1体を手札から墓地へ送って発動する。

相手の効果モンスターの効果の発動を無効にし破壊する。
この効果は相手ターンでも発動する事ができる。

《ドラグニティアームズ・レヴァティン》

効果モンスター

星8 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻2600 / 守1200

このカードは自分フィールド上に表側表示で存在する「ドラグニティ」と名のついたカードを装備したモンスター1体をゲームから除外し、手札または墓地から特殊召喚する事ができる。

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、「ドラグニティアームズ・レヴァティン」以外の自分の墓地に存在するドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。

このカードが相手のカードの効果によって墓地へ送られた時、装備カード扱いとしてこのカードに装備されたモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

《オリエントドラゴン / Orient Dragon》

シンクロ・効果モンスター

星6 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻2300 / 守1000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、

相手フィールド上に表側表示で存在するシンクロモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターをゲームから除外する。

「…ふう。終わったよ、蓮！」

フィールドに出ていた少女、クレナが実体化した状態に戻る。

「お疲れ様。ありがとう、クレナ」

「あの、私の出番は…」

「あれ、アイシア。帰ってきてたんだ」

「…あ。ごめん、引かなかった」

T D T R ・ J P P 0 0 8 〈魔王城からは、空が見られない〉（後書き）

モチベがやばい状態でこんなことするからバッドエンドルートに入っちゃった。仕方ないね。

いや、救いは用意しますよ？メインヒロインだし。

だけど、それは相当後になる予定。

T D T R はあと1話か2話で終了します。この次の章では、蓮の他にもう一人メインキャラクターが追加されます。今のところ、考えてるのは望月もちづき黒乃くろのです。

その前に受験ですけどね（リアル話）

ああ、皆さんの作品の感想欄に顔出さなきゃ…。

g o t o n e x t c h a p t e r . . .

「来た…か」

「どうしたの、弟くん？いきなり屋上に呼び出したりして…」

呉風学園、屋上。僕はメールで音姉に連絡を入れ、屋上に来てもらった。

「音姉」
おとねえ

振り返り、僕の大好きな…いや、大好きだった人の名を呼ぶ。

「なに、弟くん？」

音姉は無垢な表情を僕に向ける。やはり、ばれていることには気づいてないのだろうか。

「今日、何の日か覚えてる？」

「今日？今日は…何かあったかな…？」

「はあ…、今日は音姉の誕生日だよ」

「あ！弟くん、覚えててくれたんだ！」

「うん、まあね」

「ありがとう、弟くん！よかった…ちゃんと覚えててくれたんだ…」

「後、もう一つあるよ」

「へっ？」

そう、忘れもしない。

音姉にとって、最も忘れられない思い出にするために。

「今日はね、僕の命日なんだよ」

僕は、この日に記念日を作ろう。

P a r a l l e l + C r o s s

「…………え？」

「音姉さ、さっき教室で沙耶と話してたよね。《僕を籠絡する計画
《のこと》」

「…っ！」

「聞いちゃったんだよね、僕。《お姉ちゃんは魔王を殺すための切り札》…だったかな」

《魔王》ってのは、すなわち僕のこと。

僕をいじめるためにそれ相応の冤罪を着せて、その悪行の残酷さから命名された。所詮は不名誉な名前だけど、そのせいでいまやこの学園の生徒は俺以外みんな《勇者》だ。みんな俺をいじめることが正義だと信じ切っている。

当然、教師にも味方なんていない。僕のクラスの《織姫かりな》が上に超をいくつ付ければいいかわからないぐらいのお金持ちで、教師たちは買収か辞任かの2択を迫られた。一部には最後まで僕の味方をしてくれて、教師を辞めさせられる人もいた。

…すごいよね。誰も手を汚さなずに僕を殺したいからって、ここまでするんだよ？

ああ、言い忘れてた。「俺の心の支えになる」っていう理由だけで、俺の両親は殺されました。

「それ、は…」

「まったく、なんで僕は気付けなかったんだろ。魔王に味方なんているはずなのにね」

Feat・Yugioh Extend Advent

「違うよ!」

「違うないよ。だったらなんで音姉はあの時《初代勇者》沙耶と話してたの？」

「だってそれは、姉妹…だから」

「姉妹だから？…そっか、音姉と沙耶は姉妹だったっけ」

天河沙耶^{あまかわ さや}。音姉の実の妹で、僕の義妹にあたる。《初代勇者》ってのは、…いいや。別に知りたくもないでしょ？
ちなみに音姉も《初代勇者》の称号を持っています。

「で、それは話してた《内容》とは関係ないよね」

The Oth season

「まあ、無駄話はこれぐらいにして」

「…」

音姉は言葉を失ったのだろうか、俯いて何も言わなくなってしまうた。

「冥土の土産に聞かせてもらおうよ。音姉、これが最期の質問だ」

一度、深呼吸。

「君は、誰に指図されて僕のそばにいたの？」

THE DUELIST TRIPPER

「 !? 」

「 答えは知らない。聞いたところで、どうせ間違ってるから 」

言いたいことは言った。そろそろ、エンディングといこうじゃないか。

「 さようなら、姉さん。来世では、巡り会えない運命であることを祈ってるよ 」

「 待つて、弟くん！逝かないで !! 」

6月17日。

僕の義姉《あまかわ おとは天河音羽》の誕生日、僕《あまかわれん天河蓮》は屋上から飛び降り自殺した。

『 死んじゃだめええええ!! 』

ちなみに直後、一真紅眼の黒髪少女《クレナィヴァーミليون》の《魔法》によって、真に遺憾ながら一命を取り留めてしまうことになるのだが。

「いよいよもってさようなら、姉さん。今度こそ、永遠に」

「いや、だよ…、弟くん…！」

「『終焉よ、白き劫火と成せ！聖なる闇、願い殺す焰！！』」
ホーリーダイク・エクサフレア

クレナの周りに展開された魔法陣が、銀色の砲撃を放つ。その煌めきは全て直撃し、奴の悲鳴さえも焼き払う。それは、今まで天河蓮が背負わされた苦しみの全てだと言わんばかりに。

O t o h a L P : 1 2 0 0 - 2 8 0 0 = 0

デュエル決闘が終了し、足元に引かれていた白いラインが消滅する。

『…ふう。終わったよ、蓮！』

フィールドに出ていた少女、クレナが実体化した状態に戻る。

「お疲れ様。ありがとう、クレナ」

「あの、私の出番は…」

「あれ、アイシア。帰ってきてたんだ」

「…あ。ごめん、引かなかった」

アイシアさんは一体何のカードの精霊だったんだろう。
ドラグニティアームズ竜騎の宝鍵

って言ってたけど…？

……。

「レヴァインテイル緋色に響く疾風の刃、Action薙ぎ払え！」

「「！？」」

短剣を呼びだし、爆風に向けて緋色の刃を放つ。緋色の疾風に巻き込まれ、爆風は一瞬で消滅した。

「…逃げられたか」

「え！？」

…しかし、そこには人の姿はなく。

その代わりとばかりに、姉さんの立っていた場所には使われた後の黄色い魔法陣が消滅しようとしているところだった。

そういえば、《結晶の伝承者》…桜井姫香だったか？その姿も見当たらない。おそらく姉さんは彼女に救われる形で転移したんだろう。魔法陣の線にわずかに電流が流れていることも踏まえると、《結晶の》が持っていた携帯のストラップにありそうなサイズの《ヴァイロン・プリズム》と関係があるのだろうか。

クレナの攻撃は寸分狂わず当たっていたし、直前に誰かが防いだようにも見えなかった。だとすると、《決闘境界》に何かしらの細工があったのかもしれない。

それに気づいてさえいれば、俺は勝利の余韻に浸ることなく姉さんにとどめをさせたのに。

「じゅめん、蓮…。とどめさせなかった…」

「ううん、クレナは悪くないよ。俺のためにあんなに怒ってくれてうれしかった。ありがとうね」

「…うん…！」

「私は…空気なんでしょうか…」

「おお、アイシアではないか。よくぞ戻った」

「あ、ミツキさん。お久しぶりです」

昔、誰かが言っていた。

「音羽さん…」

精霊界から何とか私と音羽さんは私の部屋に戻ってくることができました。ですが、もし《氷結の伝承者》の言葉がなかったら、音羽さんは殺されていたかもしれませぬ。

《竜騎の伝承者》である空見さんが、まさか音羽さんの義理の弟である《天河蓮》だったなんて、思いもありませんでした。しかも、音羽さんに対して明確な殺意を持っていて…。

「いよいよもってさようなら、姉さん。今度こそ、永遠に」

「今度こそ」ということは、一度音羽さんは蓮さんと死別しているのでしょうか…。もしかして、

「私、馬鹿だよな」

私が物思いに耽っていると、先ほどまで茫然としていた音羽さんが口を開きました。

「音羽、さん…?」

ですが、音羽さんの瞳に光が灯っていない…!?

「私が死んでからね、沙耶の夢の中で聞いたの。弟くんは本当は死んでなかった。でも、私に会いたくないからって理由で苗字を《天河》から《空見》に変えたんだって。それに《そらみれん》って、弟くんの誕生日が七夕だから…」

「……………」

声が、出ませんでした。どんな言葉を並べても音羽さんを傷つけてしまうような気がして…。

「離ればなれになった私と弟くんが二度と会えないように、そんな苗字に変えたんだって……………」

「……………」

「わかってたのに…弟くんが私のこと嫌いになっちゃったって、わかってたのに　　！！」

この世界に運命はない。

「…あれ、でも何で俺が姉さんに裏切られたショックで自殺しようとしたって知ってたの？」

「……」

「あっちみんな」

クレナ、何で視線をずらすのさ？

「…蓮」

「あ、ミツキ…」

「お主と奴の間には、複雑な関係があるようじゃな」

「…うん」

「それさえわかれば十分じゃ。深く詮索はせんでおこうかの」

「…うん、ありがとう、ミツキ」

「しかしな、お主にこれだけは正しておかねばの」

「…？」

「妾もクレナも、自分の意思でお主と共にいるのじゃぞ」

「…！！」

ミツキの言葉、それが何に対しての答えなのかは何故かすぐにわかった。

《君は、誰に指図されて僕のそばにいたの？》

今の言葉こそが、俺の望んでいた《100%の回答》だったのかもしれない。

「そつだよ！蓮が私を信じられないなら、信じてもらえるまでずっと一緒にいてあげるっ！」

「妾の言おうとしていたことを先に言うなっ！…まあ、そついうことじゃ。ここから先、妾たちは一蓮托生じゃ。お主の名前になぞらえて、な」

「…ありがとう、2人とも！」

この世界の全ては2つ。

東北地方某駅。

「ふう、やっと着きました…」

都内へと向かう電車が来るのは4番ホーム。階段を下り、ホームのベンチに座りました。しばらく歩きっぱなしだったので、ようやく足を休められます。

《…エキの中って、こうなってるんだね》

《ああ、案外広いんだな》

《で、そのデンシャっていつ頃到着するの?》

《そんなことボクに聞かれても…》

と、私の精霊達がカードの中から出てきました。

《そついえば《伝承者》様、これからボクたちはどこに行くの?》

エリアルが眠たそうに私に訪ね…エリアル、私の話聞いてました?

《ちよっ…エリアル、話聞いてなかったの?》

案の定、エミリアが突っ込みを入れてくれました。

《聞いてないよ?寝てたもん》

「《ですよねー》」

私とエミリアの声が重なります。

《…で、着いてからはどうするんだ?》

流れを戻すように、アバンスが私に問います。…そういえば、着いてからのことは言ってますでした。

「そうですね…、まずは《ストラストス・ドラグーン天を統べる竜騎士》の空見君と合流しましょうか。それからは考えてませんが、会ってからで十分だと思います」

《わかった。エリアルル、エミリア、聞いてたか？》

《《…え？》》

《…いや、聞いてないならいいんだ》

…ああ、2人ともアバンスに呆れられました。

《《え、ちょ、何を！？》》

《幻創の伝承者》。それが、この世界に呼ばれた私に与えられた使命の証。

《幻創》とはつまり、【リチュア】のこと。

この世界には、私のいた世界でのストーリーとは大きく違う点が一つありました。それはかつて氷結界の巫女だった《リチュア・エリシア》が儀水化を治す術式を持つていたこと。

ですが、《過去のエリシアが歴史を変えた》ことで、世界は崩壊を開始します。ヴェルズ達が過去に向かうのを食い止めながら、エリシアが私に《術式》を託し、《エリアルル》《エミリア》《アバンス》の3人と私を過去の精霊界に飛ばしました。《イビリチュア・プ

シユケローネ』となった《リチュア・ノエリア》と《イビリチュア・
エク립セイド》となった《リチュア・エリシア》が、《伝承者》
である私に、【リチュア】氷結界の全てを託して…。

「あんたたち！くレぐれも、絶対に儀水鏡ヲ割つたりスルン
じやないヨー！」

「《幻創の伝承者》よ、過去ノ妾を…《氷結の伝承者》ヲ、
頼ンダゾー！」

《ゆみな？》

未来の氷結界での出来事を振り返っていると、デッキから私の4人
目の精霊が姿を現しました。

「…あ、スノウ。目は覚めました？」

《ええ、御蔭様でこの通りですわ》

スノウ＝フリージア。《ブリザード・プリンセス》の精霊である彼
女は、リチュアの最期を目の当たりにして落ち込んでいた私たちを
城の中に迎え入れてくれました。手厚くもてなしてくれた上に、最
後は私たちをこの物質界に送ってくれました。

が、その時に転送魔法を使用したスノウ自身も飛ばされて
しまいました。スノウ曰く

『計画通り、ですわ！』

とのことですが。どうやら彼女、城の中の生活がつまらなくて、何

とか抜け出す口実を探していたみたいです。

とりあえず今は、私の【墓守】デッキに1枚だけ入れている《ブリザード・プリンセス》の中に入り込んで私たちと行動を共にしていきます。

《古を紐解く氷結姫》エンシェント・プリンセス。それが、アカデミアの入試試験に合格した私に与えられた二つ名。試験で使ったデッキが【墓守】+とどめを刺したのが《ブリザード・プリンセス》だったせいか、こんな名前をもらいました。なんか厨二っぽいですけど、遊戯王自体厨二病の塊みたいなものなのであまり気にしません。それよりも、なんで私以外みんな試験に落ちちゃったんでしょうか。私はそっちの方が気になります。試験官の方も「ああ、次は新潟か…」なんて言っていましたし、全国を回る必要があるんですね…一人で。頑張ってください。

私が元いた世界の学校カバンから、2つのデッキを取り出しました。【リチュア】と【墓守】。GXとも5D'sとも、無印ともZEXALとも違うこの世界で、この2つのデッキは未来を歪めてしまう可能性を孕んでいるのかもしれませんが、ですが、この世界に来てしまった以上、使わないわけにはいきません。それが、《決闘者》デュエリストとしての私の決意。

4番ホームに、電車が入ってきました。

命の関わらない《偶然》と、関わる《気まぐれ》のみ。

「レヴァイン様、ただいま戻りました」

『ああ、ご苦労だった』

「アイシア！お前、ライトロードの試練は大丈夫だったのか！？」

「スルト……。すみません、あと一歩及びませんでした」

「そうか……。とりあえずお帰り、アイシア」

「……はい、ただ今戻りました！！」

『（……クレナ＝ヴァーミリオン。貴様が一人の少年の為に《神になる資格》を捨てたことには正直驚いた）』

「わ、ちよっアイシア！？」

「たまにはいいじゃないですか、スルト！少しくらい、抱きしめさせてください！！」

『（……だが、その選択は誤ってなどなかったのかもしれない）』

「スルト、クレナどこ行っ……。ああああああ！？」

「あ、ユグドラさん！ただいま戻りました！」

「ちょ、離れなさいアイシア！スルトが「私のです」スルトお
あああああ！！」

「…これ、もしかしてレヴァインから？」

そういつて、ミツキとクレナに1枚目のカードを見せる。

「…うむ、そのようじゃな」

「そう、みたいだね…」

1枚目

《オシリスの天空竜》。

…俺は、考えるのをやめて3枚ともカバンの中にしまった。

「それじゃ、そろそろ試験会場に戻ろうかな」

「…あ」

「…は？」

T D T R ・ J P P 0 0 9 へ我紡ぎしは、始まりの物語（後書き）

2011年も今日が最後となりました。

というわけで、何とか今年中に序章を完結させることができました。

次の章は来年、センター試験開始までは執筆開始に至れないと思われ
れます。いい加減、大学受験に備えないといけないものですから。

ガキ使？

リアルタイム視聴に決まってるじゃないですか（ドヤア

というわけで、今年の更新はこれで最後となります。

それでは皆さん、よいお年を。クレセントでした！

g o t o t h e n e x t y e a r 2 0 1 2 . . .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1899u/>

Parallel † Cross - 遊戯王EXA -

2011年12月31日01時47分発行